筑波大学 社会貢献プロジェクト
2019−20

筑波大学社会貢献プロジェクト 2019－20

社会貢献プロジェクトとは

社会貢献プロジェクトは、筑波大学と社会との多様な形での連携活動を学内公募し、総合的に支援するもので、平成 16 年度にスタートしました。平成 21 年度からは教員だけでなく学生も申請できるものとなっております。

本プロジェクトは、特定の分野に限定することなく、地域との連携活動を自由に提案することを特徴としており、「科学振興」、「国際」、「文化・地域活性化」、「環境」、「健康・医療・福祉」等、内容は多岐に亘っています。昨年度も様々なプロジェクトが実施され、本学ならではの取り組みを展開していきました。

〈筑波大学社会貢献・地域連携 HP〉
https://scpj.tsukuba.ac.jp/

筑波大学社会貢献プロジェクト 2019−20

＊掲載されている全ての写真は 2019 年度以前に撮影されたものです。

科学振興

- 筑波大学発　−おもしろふしぎ理科実験・工作隊− …… 4
  数理物質系　准教授　小　林　正　美
- 地域社会貢献のための小中高校生への理科教育啓発活動 …… 6
  数理物質系　准教授　後　藤　博　正
- 学生によるサイエンスコミュニケーションの実践　〜筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT〜 …… 7
  生命環境系　助教　Matt Wood
- TSUKUBAX（つくばクロス）bio art project …… 8
  芸術専門学群　島　田　千　聖

国　際

- 国際都市つくばの新しい国際化施策　−定住外国籍児童に対する「職育」プログラム …… 9
  人文社会系　准教授　明　石　純　一
- 筑波大学発 SDGs 活動発信拠点形成とつくば SDGs パートナーの育成 …… 10
  生命環境系　教授　田　村　憲　司

文化・地域活性化

- コミュニケーション・スキルアップとしての「夏休みアート・デイキャンプ&アートたんけん隊 2019」の実施 …… 11
  芸術系　准教授　程　塚　敏　明
- 哲学カフェによる地方創生〜「町を日本の故郷にする」プロジェクト …… 12
  人文社会系　准教授　五十嵐　沙千子
- マンガでトランスボーダー Vol.4：マンガであなたとつくばと世界をつなごう！ …… 16
  国際室　教授　森　尾　貴　広
- 高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト：広報誌を介した地域づくり …… 18
  人間系　教授　原　田　悦　子
- 博学連携による地域文化財の再生と利活用　−土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの展開− …… 19
  人文社会系　准教授　滝　沢　　誠
- つくば市における外国人児童生徒支援体制の構築 …… 20
  人文社会系　准教授　松　崎　　寛
- Hack My Tsukuba 2019　〜市民の市民による市民のための問題解決〜 …… 22
  システム情報系　教授　川　島　宏　一
- 盆 LIVE2019 …… 23
  人間学群心理学類　阿　部　光　多
- 多様な人々が食でつながり健康になる多文化共生ガーデン …… 24
  生命環境系　助教　新　保　奈穂美

環　境

- 「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2019… 25
  生命環境系　助教　丸　尾　文　昭
- 温帯域サンゴの重要性の普及啓発に向けた産学連携活動…… 26
  生命環境系　助教　アゴスティーニ　シルバン
- 環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業…… 28
  生命環境系　教授　上　條　隆　志

健康・医療・福祉

- 摂食障害の予防、早期発見・早期治療、医療連携、社会復帰を目的とした総合的な疾患啓発と疾患教育… 29
  附属病院　病院講師　塚　田　恵鯉子
- 医療依存度の高い術後遠隔期の患児・家族への支援　～心臓病とたたかう子供たちを夢のキャンプ地へ 2019～… 30
  附属病院　看護師　柿　本　静　香
- 発達障害のある高校生向け大学生１日体験講座　～大学生になる自分を研究しよう～…… 34
  人間系　准教授　佐々木　銀　河
- 『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2019』　～小学生対象の医療現場体験ツアー～ …… 38
  附属病院　看護師　関　水　千　夏
- 国際標準心肺蘇生法の普及…… 40
  医学医療系　准教授　髙　橋　伸　二
- ゆうゆうゆう会…… 42
  人文社会科学研究科　博士前期課程　澤　井　雪　乃
- 地域市民を対象にした BLS 講習会、健康教育 …… 43
  医学群医学類　福　元　崇　人
- 地域在住の父子（男子小児および父親）を対象としたボード・ゲームを用いた運動習慣向上についての検証 … 44
  附属病院　理学療法士　鈴　木　康　裕
- 外国人介護職員の就労支援プロジェクト…… 45
  医学医療系　准教授　柳　久　子
- いばらき周産期メンタルヘルス向上プロジェクト…… 46
  医学医療系　准教授　根　本　清　貴
- 住民主導型減量支援プログラムの体系的評価…… 47
  体育系　准教授　中　田　由　夫

防災・震災復興

- Tsukuba for 3.11…… 48
  理工学群応用理工学類　成　田　隼　翼

その他

- 農業体験学習を通じた地元小学生の農業理解の推進…… 49
  生命環境系　助教　加　藤　盛　夫

筑波大学発－おもしろふしぎ理科実験・工作隊－

【活動地域：茨城県全域、千葉県】

数理物質系　准教授　　小林　正美

1 事業の概要

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

2 事業成果の概要

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。さらに、一般の方を対象とする企画（例えば、つくば科学フェスティバル、おとなのためのサイエンス講座、うしくみらいエコフェスティバルなど）も、地方自治体との連携のもと有意義に行うことが出来た。

3 地方自治体等との連携

茨城県　つくば市教育委員会
大子町教育委員会
県北生涯学習センター
水戸生涯学習センター
県南生涯学習センター
県西生涯学習センター
牛久市役所
国府地区公民館
守谷市中央公民館
高野公民館
阿見町立中央公民館
戸頭地区民生協議会
エキスポセンター

千葉県　我孫子市教育員会
我孫子市アビスタ
近隣センターふさの風
我孫子市民プラザ

4 今後の展望

より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

令和元年度社会貢献プロジェクト

筑波大学発 -おもしろふしぎ理科実験・工作隊-

小林　正美（物質工学域・准教授）　重川　秀実（物理工学域・教授）　中村　潤児（物質工学域・教授）
木島　正志（物質工学域・教授）

背景と目的

月数回、小・中・高校生を対象とする理科の実験・工作の演示・指導を行うことで、児童・生徒の理科に対する能力を開拓することを目的とする。
加えて、生涯学習の観点から、一般の方を対象としたテーマも扱う。地域の自治体等と連携することで、できるだけ広範な社会貢献を目指す。

成果

茨城県と千葉県を中心として、主に小・中・高校生を対象とした出前科学レクチャーを多数行うことが出来た。それに加え、一般の方を対象とする企画（例：つくば科学フェスティバル、うしくみらいエコフェスタ、我孫子市市民講座など）も、地方自治体との連携のもと、有意義に行うことが出来た。

令和元年度 出前講義一覧

4/2　(火) スプリングスクール
4/20 (土) 科学技術週間
5/18 (土) 国際植物の日
6/20 (木) 附属高校
6/22 (日) ガールスカウト茨城12団
6/27 (木) 取手市立取手第一中学校
7/7　(日) 我孫子けやきプラザ
7/10 (水) 附属駒場高校
7/13 (金) 日本大学習志野高校
7/21 (日) 石岡市立国府地区公民館
7/28 (日) 大子町教育委員会
7/31 (水) リケ女サイエンスカフェ
8/1　(木) リケ女一日体験
8/7　(水) 筑西市立下館小学校
8/20 (火) 神栖市息栖小学校
8/21 (水) 取手市戸頭地区民生委員児童委員協議会
9/1　(日) おとなのためのサイエンス講座
9/8　(日) おとなのためのサイエンス講座
9/12 (火), 13 (水) 常磐子弟高大連携
9/14 (土) 阿見町立中央公民館
9/15 (日) 我孫子市民のちから祭り
9/18 (水) 取手市立取手第一中学校
9/28 (土) 近隣センターふさの風
10/18 (金) 我孫子市生涯学習出前講座
10/27 (日) うしくみらいエコフェスタ
11/1　(金) 緑が丘高校
11/16 (土), 17(日) つくば科学フェスティバル
1/24 (金) 我孫子地区公民館
2/2　(日) 城ノ内育成会
2/28 (金) 石岡市立瓦会小学校
3/5　(木) Kids Creation TSUKUBA　[コロナで中止]
3/18 (水) 我孫子市生涯学習出前講座　[コロナで中止]
3/27 (金) スプリングスクール　[コロナで中止]
3/29 (日) 我孫子市生涯学習出前講座　[コロナで中止]

出前講義写真

今後の展望

今後も、より広範な地域・年齢層に対して、生涯学習の観点から社会貢献していきたい。

科　学　振　興

地域社会貢献のための小中高校生への理科教育啓発活動

【活動地域：茨城県つくば市】

数理物質系　准教授　　後藤　博正

1 事業の概要

つくば理科学シンポジウム、高校生向け理科実験講座およびつくば科学フェスティバル出展を行った。

2 事業成果の概要

出前実験では

1）タマムシ液晶の作製
2）夜光ゲルの作成
3）静電気センサーの作成
4）導電性高分子ポリアニリンの合成実験
5）クロマトグラフィーの基礎実験
6）ラジオの製作
7）モアレ干渉縞 などの体験型実験に加え
8）ボコーダー
9）テルミン などの作動原理説明を行った。

本プロジェクトで展示用遠隔エネルギー伝送システムを開発した。児童がスイッチを押すだけで遠隔に位置するドーナツ型蛍光灯が波を打って光るこの装置はつくば科学フェスティバルで注目を集めることができた。

さらに高校時から求められる国際化に対応し、つくば理科学シンポジウムを行った。本活動を通して高校生の国際化、および応援を十分に行うことができたと思われる。

茨城県内各高校、つくば市内の中学校、茨城県教育庁学校教育部、つくば市教育庁とこれからも連携を深め活動を行っていきたい。

学生によるサイエンスコミュニケーションの実践 ～筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ SCOUT ～

【活動地域：茨城県つくば市等】

生命環境系　助教　　Matt Wood

1 事業の概要

筑波大学サイエンスコミュニケーショングループ・スカウト（SCOUT：Science Communication of the University of Tsukuba）として平成21年４月にスタートして以来、活発に活動を続けている。

スカウトは、地域に対する社会貢献としての科学あそびラボを多数開催しており、学生たちのサイエンスコミュニケーション実践の場としての意味も非常に大きい。ここ数年サイエンスコミュニケーションの重要性が叫ばれるが、学生が実際に経験する場は少ない。その意味で子どもたちに対して科学を伝える「科学あそびラボ」は学生にとって非常によいトレーニングとなっている。

2 事業成果の概要

科学技術週間に行われる筑波大学キッズユニバーシティおよび国際植物の日に、「科学あそびラボ」として、小学生を対象にした科学実験を行った。

また12月に行われた「ミツバチサミット2019」においても小学生向けの科学実験を担当した。

3 地方自治体等との連携

キッズユニバーシティには、つくば市内の小学生が多く訪れており、筑波大の学生との交流も深めている。また令和元年度に初めて参加したミツバチサミットは筑波大学や茨城県、つくば市をはじめとする様々な機関によって開催されていたことからつくば市内で科学実験教室等を開催している人たちとの交流を深める機会ともなった。

4 今後の展望

令和２年３月に次年度に向けての学生対象のワークショップを開催する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により集まることが難しく、延期となった。また報告書作成の５月時点では、不特定多数の子どもを対象にした科学実験教室の実施は困難である。一刻も早い終息を願うばかりである。

5 その他

開催日時	内　　容	参加人数
筑波大学キッズユニバーシティ 2019. 4. 20	親子向け科学実験教室「黒の秘密をさぐれ」	200名程度
国際植物の日 2019. 5. 18	同上	30名
GEMS ワークショップ 2019.10.26	ミツバチサミットでの科学実験教室開催にあたり、ジャパンGEMSセンターにてワークショップ実施	10名
ミツバチサミット 2019.12.14	小学生向け科学実験教室「ミツバチのからだを知ろう」	20名

TSUKUBAX（つくばクロス）bio art project

【活動地域：茨城県つくば市、東京都渋谷区】

芸術専門学群　　島田　千聖

1 事業の概要

本企画では生物に関する作品展示を東京都渋谷区およびつくば市で行うことにより、生物の理解を広める展示活動を行うことを目的とした。なぜなら、まだ生物の一般的理解度はさほど高いとは言えない。生物学者が生物学を人に伝えるときに事実を伝えて覚えさせるのはよくあるパターンだ。しかし、その事実を伝えるだけでは生物学の魅力、社会へのつながりは十分に理解できない部分も多い。

そこで、本企画ではアートにより、生物の事実の理解を促進できるように芸術作品の展示を行った。生物学の魅力を十分に引き出しビジュアライズ化するという芸術的表現によって、生物学という専門的な内容を人の感情に分かりやすく訴えることができると考えたためだ。加えて、広範囲な地域向けの展示を行うことは地域の活性化を生み、社会貢献につながると考えたからだ。

また本企画では、筑波大学の総合大学という特性を生かして、他学類間での学群を超えた交流により化学反応を起こし、新しいクリエィテイブ作品を生み出そうという試みを行った。

2 事業成果の概要

↓渋谷区で行った展示のポスター

生物学群と芸術学生で度重なるミーティングを行い、プレゼンテーションや話し合いからインスピレーションを得て、展示までの期間、作品制作に励んだ。

その後、春学期の終わりに展示室渋谷区 100 BANCHI にて展示を行った。生物の普及を主な目的として行ったこの活動では、会期の 1 週間ほどで述べ 6,000 人以上の来場者が訪れた。

秋には、筑波大学内の T+ でも展示を行い、述べ 250 人程の来場者が訪れた。

成果として大学内にとどまらない他地域での作品展示を行ったことにより、他大学の学生ら等から反響があった。また、生物がより分かりやすくなっていて面白い活動だと思うといった声もあった。まだ影響としてはとても弱いものかもしれないが、続けていけば何かしらの実りのあるものに変わって行くのではないかと期待をしている。

3 地方自治体等との連携

春は東京都渋谷区の 100Banchi にて展示を行った。秋は大学内の T+ にて展示を行った。

特に春の展示は、東京にもキャンパスがある筑波大学学生が、東京へ進出し展示を行ったことは、つくば市の知名度を広めるといった意味でとても有意義な活動であったと思う。

4 今後の展望

メンバーや展示で興味を持ってくれた方々への交流を大切にし、こういった展示の活動を継続的にやっていきたいと思う。

5 その他

ご協力いただいた村上史明（芸術系）先生、臼井健郎（生命環境系）先生に心より感謝申し上げます。

国際都市つくばの新しい国際化施策
―定住外国籍児童に対する「職育」プログラム

【活動地域：茨城県つくば市ほか】

人文社会系　准教授　　明石　純一

1 事業の概要

本事業は、つくば市に居住する外国籍住民、おもに青少年や児童に対する職業教育（以下、職育）支援を実施するものである。彼（女）らに対して進学・進路指導やキャリアアッププログラムを提供するとともに、同事業の趣旨と目的を共有するグループ（自治体、公立学校、大使館、NPO、企業等）間のネットワーク化を積極的に進め、事業の効果的運営を試みている。本学の学生も上の活動に参加することで、市民活動の多様な経験を積む恒常的な機会が創出されている。本事業の企画と運営にあたっては、財団法人日伯経済文化協会（ANBEC）とも連携をはかり、その専門的リソースを外国籍児童への支援に活かしている。

2 事業成果の概要

主たる活動の一つ目は、支援対象者へのキッザニア体験の提供である。対象校は、TS学園、エドゥカーレ校、オプション校である（事前・事後授業を計8回、参加者計 50 名）。別途、公立学校在籍のブラジル人児童生徒を対象として、キッザニア体験を提供した。当日は児童生徒と引率保護者を含めて計 147 名に達した。

キッザニア体験日の集合写真

主たる活動の二つ目は、有識者フォーラムである。外国籍住民の支援に関わる専門家や大学研究者を招聘しフォーラムを開催した。本学からも同分野に関連する研究に従事する大学院生が複数参加、報告を行った。

フォーラムのポスター

三つ目は、ワークショップ（教育とキャリアによる夢の実現に向けて）の開催である。同イベントにはつくば市・茨城県内外から関係者を招き、筑波大学発の本事業を通じて得られた知見の普及に努めている。本事業を盤石にするために様々なステークホルダーから共感を引き出し、その結果として協力を取り付ける機会として位置づけている。

ワークショップの開催風景
（筑波大学人文社会学系棟 A）

上記ほか連絡協議会の実施など多様な活動を含む本プロジェクトは、多くの外国籍児童の「学ぶ動機」と「働く意欲（想像力）」を長期的に高めることに資しており、地域の教育関係者から好評を得ている。また、結果的に本学学生の異文化理解や国際交流の実践経験にもつながっている。

3 地方自治体等との連携

イベントへの参加依頼や情報共有・意見交換を中心に、県内の教育機関関係者（公立学校の国際担当教員ほか）や国際課等との協力を多面的に進めている。

4 今後の展望

本事業・活動への参加者数は、現在に至るまでのべ 5,000 名近い。こうした実績と成果を踏まえ、地方自治体との連携をより強化、事業を公式化していくことが望まれる。上を念頭に置き、大学発地域実践型の国際社会貢献モデルを示し、将来的には公的予算により自治体との協業で運用可能なモデルスキームとして成立させることを引き続き目指したい。なお 2020 年度は新型コロナウイルスの影響を鑑み、遠隔支援ツールの開発と充実に努める。

国　　際

筑波大学発 SDGs 活動発信拠点形成と つくば SDGs パートナーの育成

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系　教授　　田村　憲司

1 事業の概要

つくば市は、2018 年２月に「持続可能都市ビジョン」を発表し、同年６月には、国から「SDGs 未来都市」に選定された。これに基づき、行政、民間、市民などあらゆる関係者の間で、持続可能なまちづくりに向けたパートナーシップを深めるとともに、連携・協力を促進している。つくば SDGs パートナーを育成する本事業は、筑波大学とつくば市が連携して、持続可能なまちの実現に向けて、取組を行っている方や、これから取組みたい方、取組に興味がある方に加入いただき、参加メンバーが主役となったまちづくりを進めるためのネットワークを形成するものである。

2 事業成果の概要

つくば市の SDGs 推進に対して強く関心を持ち、自発的に発信する意識の高い「つくば SDGs 未来都市」ファンを育成するとともに、パートナー同士が交流して刺激を与え合う機会や SDGs を発信するための行政からの情報提供を受ける等のつくば SDGs パートナー講座およびワークショップを定期的に実施する。

一昨年末の 12 月より、筑波大学サテライトオフィスおよびつくば市役所コミュニティ棟を SDGs 発信拠点と定めて本講座を実施し始めた。今年度、本格的に始動した。具体的には、以下のとおり開催した。今年度、新たに 129 名のつくば SDGs パートナーが誕生した。

第１回　「SDGs をどう実現・行動するか － つくばの水環境を通して考える」
（筑波大学名誉教授 田瀬 則雄 氏）５月19日（日）

第２回　「SDGs と JICA の取り組み」
（JICA 筑波 小林 健一郎 氏）７月26日（金）

第３回　「SDGsの社内浸透99.6%はこう実現した」
（リコージャパン（株）太田 康子 氏）９月17日（火）

第４回　「多文化共生を考える～外国人材の受入れと日本社会のこれから、そして SDGs」
（筑波大学人文社会系 明石 純一氏）１１月26日（火）

第５回　「SDGs の達成に向けた取組」
（東京電力ホールディングス株式会社 高橋 浩之氏）
2020年１月18日（土）

つくばSDGsパートナー講座（2019年１１月26日（火））

3 地方自治体等との連携

つくば市と筑波大学の連携事業として、つくば市の持続可能都市ビジョンを市民に広く普及、啓発する目的で、つくば SDGs パートナーの育成を推進しているが、つくば市政策イノベーション部企画経営課と連携して、つくば SDGs パートナー講座の受講生を募り、つくば SDGs パートナー講座を実施する連携体制が整った。

4 今後の展望

SDGs 推進都市としてのつくば市の人材資源をフル活用して、人間の五感や感性に訴える「つくば SDGs パートナーズセミナー」やつくば SDGs パートナー同士の交流であるつくば SDGs パートナーズミーティング（仮称つくば SDGs パートナーズサロン）を実施する。さらに、SDGs パートナーが中心となって、いくつかのチームをつくり、SDGs ワークショップを開催し、つくば市の課題に取り組む活動家の育成を図る。

5 その他

本年３月に第６回を開催予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、延期となった。

コミュケーション・スキルアップとしての「夏休みアート・デイキャンプ＆アートたんけん隊 2019」の実施

【活動地域：茨城県つくば市】

芸術系　准教授　　程塚　敏明

1 事業の概要

現代のデジタル世代の子供達において、身体感覚や美的創造力を育む美術や音楽などの「情操教育」は、より重要性を増している。本事業は本学芸術領域が行う「こころの支援」であると同時に、アートを通じた「地域活性化」及び「人材教育」である。今回で 12 回目の実施となり、本学の芸術領域による夏のアートイベントとして認知されている。今年度は小中高と多様な年代の参加者とアートを通じたコミュニケーションと表現する喜びを体感することに加え、多くの芸術学生スタッフのコミュニケーション能力のスキルアップを目指して本プロジェクトを実施した。

2 事業成果の概要

プログラムは「制作と鑑賞」を柱として、3つの活動で構成されている。それぞれ芸術教員指導のもと学生スタッフが中心となり、約 150 名の芸術を専門とする日本人学生及び留学生が参加した。

【アート・デイキャンプ】（7月 20 日、21 日）体芸エリア 5C 棟の大石膏室を中心会場として、ダビデ像等の大型石膏像、鳥の剥製や観葉植物などを観察して描く「写生会」を実施。両日定員 120 名（小中高校生）＋小学生の保護者が参加した。

大石膏室でのアート・デイキャンプ

【アートたんけん隊】（7月 20 日、21 日）本学内に展示されている芸術作品を大学院生が用意した「鑑賞ツール」を用いて楽しみながら鑑賞するプログラム。その他、学生アトリエも見学した。

【夏休みアート・デイキャンプ展】（8月 20 日～ 25 日）事前に作品審査会を開催し、優秀作品には賞を授与した（8月 20 日、表彰式）。展覧会場は茨城県つくば美術館で、全員の応募作品（377 点）を展示した。

夏休みアート・デイキャンプ展 2019

3 地方自治体等との連携

（公財）つくば文化振興財団とつくば市の協力体制と役割分担も構築されており、つくば市文化芸術推進基本計画の活動としても施策されている。

4 今後の展望

今回保護者を対象にクラフト系の授業を紹介するワークショップを行ったところ大変好評であった。これまで絵を描くことを中心として行ってきたが、本学の幅広いアートの領域を活かしたプロジェクトの展開を検討していきたい。

哲学カフェによる地方創生
～「町を日本の故郷にする」プロジェクト

【活動地域：岩手県花巻市・盛岡市、山口県萩市、熊本県熊本市】

人文社会系　准教授　　五十嵐　沙千子

1 事業の内容

大震災以後、加速する人口流出と深刻な高齢化に直面している過疎の町は多い。都市は人口集中に悩み、地方は過疎に悩む。それが現代日本社会の大きな問題だということは周知の通りである。

これまで２年間にわたり、われわれは、過疎に直面する岩手県花巻市の活性化に取り組んできたが、本年度はさらに、地域の壁を越え、大人と子供の壁を越える、全国的な地方活性化プロジェクトを展開した。

過疎の問題をその地域だけで解決しようとするこれまでのやり方は既に行き詰まっている。それは地方だけの問題ではなく日本全体の問題である。しかも地方での豊かな生活を実現することは、都市の生活を、さらに日本全体を豊かにすることに直結する。また、この問題は単に専門家が、あるいは「大人」たちが解決すれば良い問題ではなく、まさにこれからの日本を担う高校生たちが大人と共に考え、協働して取り組んでいくべきことである。

そこでわれわれが企画したのは、全国の高校生による地方創生サミットである。

（全国高校生サミットポスター）

サミットの中心になったのは花巻市である。東京をはじめ全国から選抜された高校生６名（筑波大学プロジェクトによる旅費滞在費全額補助。地方創生に関する論文審査による）と、全国各地からの自費参加者、合わせて 30 人近くの高校生が夏休みの花巻に集まり、地方創生の立役者として全国的に活躍している様々な大人たちと二泊三日の対話を行なった。

このサミットのテーマとなったのは、「高校生はどんな未来の日本をデザインするのか？」また「大人は高校生と共に、地方は都市と共に、どんな共同の未来をデザインするのか？」である。

（高校生サミットの様子）

さらに、このサミットでの対話を中心にして、秋以降、われわれは、花巻市と、地方創生の成功事例である山口県萩市、および熊本地震以降の復興を模索している熊本県熊本市との対話を進めた。全国の様々な地域・様々な属性の市民たちの対話を生み、そこで形成されたシナプスをより強靭なものにしていくことがわれわれの課題だと考えたからである。

その際の手法としてわれわれが選択したのは「哲学カフェ」、特に「ホール・システム・アプローチ」の形式での対話である。この手法は、大規模な市民間対話に非常に有効な手法として、アメリカ各地や横浜市などでも使われているが、対話のプロセス・デザインが複雑であること、実際のファシリテーションが困難であることから非常に高額の費用を伴うものとなっており、財政難を抱える過疎地域ではこれまで導入されていない。このアプローチはわれわれ「哲学カフェ」の得意分野であることから、今

回のプロジェクトでもこの手法を採用し、大きな成果を上げることができた。

さて、われわれが今回、連携先として選択したシナプスは、先述したように、花巻、萩、熊本の三県三市であるが、まず山口県萩市では、萩高校での高校生たちの哲学カフェ、さらに翌日には高校生と市民たちとの共同の哲学カフェを実施し、花巻サミットでのテーマに萩での問題を重ね合わせて議論を深めた。その議論を、われわれは年明けに熊本に拡大した。熊本市は九州有数の大都市であり、また地方創生が成功して独自の魅力を形成する地域であるが、大地震以降の復興に悩んでいる町でもある。熊本市においては熊本高校における熊本高校生サミットを開催し、さらに翌日には、熊本のみならず鹿児島から福岡まで九州全土から集まった総勢 50 人近い市民たちの対話を実施した。

（ホール・システム・アプローチ。市民間対話の様子）

こうして、夏に始まった全国高校生サミットの成果を、秋には萩市、年明けには熊本市に拡大したあと、われわれはその連帯の成果を三月初頭の岩手県盛岡市に持ち帰った。岩手県内をはじめとして青森や仙台などからも市民が集まり、一年を纏める密度の濃い対話を行うことができた。

県や町の壁を越え、また大人と高校生の、専門家と一般市民の壁を越えた、広い共同での対話によって、自分たちの住む日本を共に作っていこうとする今回の筑波大学哲学カフェプロジェクトは大成功であったと言えるだろう。

本学および関係各位に心から感謝したい。

2 事業の成果

本事業の最大の成果は、地方創生を中心テーマとする全国の高校生たちの連帯、地域や属性を越える市民と高校生の連帯を作り出すことに成功したことであるが、高校生サミットや、萩・熊本での高校生対話、市民間対話などがラジオや地元テレビ、また新聞等で広く広報されたことは、本学の社会的プレゼンスを高める上でも非常に大きな成果となったと言える。

（萩での哲学カフェの新聞記事）

3 地方自治体等との連携

この３年間のプロジェクトを通して、花巻、盛岡、萩、熊本など各市の高校や教育委員会等からの招聘依頼や、また各地域で地方創生に取り組んでいる市民団体との連携が現在も継続しており、コンサルティングを進めているところである。

4 今後の展望

本プロジェクトは、花巻の高校生たちが始めた市の再生への思いを引き継ぎ、子供／高校生／高齢者／市に住むさまざまな年齢・属性の市民たち／行政など、全国の全ての市民たちの間に、自分たちの住む町づくりに向けての持続的で生成的な大きな対話を立ち上げてきた。こうした協力体制の中で、持続的で生成的な、息の長い地域再生プロジェクトを継続することができれば、他に類を見ない革新的な地域再生プロジェクトとして、本学の名を高めるものと確信している。幸いなことにわれわれにはワールドカフェプラクティショナーの資格を有するメンバーがいる。ホール・システム・アプローチを実施する財源を持たない日本各地に、筑波大学の支援で、今後も哲学カフェを中核とした市民間対話が継続されることを強く求めたい。

（全国高校生サミット関連資料）

①全国高校生サミットのハーベスト：高校生たちのデザインした未来の地方創生

②全国高校生サミットのハーベスト：高校生たちから寄せられた感想の一部

◆◆◆◆◆

正直、未だ消化しきれていないことや、新たに言いたいことがわいてきて、脳の中に巨大な泥水のうずがあるかのようです。考えすぎて気持ち悪い。来なければ、一生こんな感触を体験することはなかったと思います。でもそれは、決して「来なければ良かった」ではありません。この場にこなければ、こんな体験なんてできなかった。一生できなかった。一生の宝物になると思います。

◆◆◆◆◆

心の枠をぶっこわされたような、、心の中に洪水が起こったような、、頭に稲妻が走ったような、、そんな衝撃でした。「どうして遠野だけが“私の”故郷なのか？」

地球に生まれたから地球が故郷だ、に行きつきました。書きたいことはまとまりませんが、、、脱皮宣言！

頑張ります、とっても楽しかったです。ありがとうございました !!!

◆◆◆◆◆

「決定的に変わった」というのは、軽率のようでいて、私の真理であった。

出会った人に思いを馳せて、生きていくように、なる。心から感謝申し上げます。

◆◆◆◆◆
様々な意見を交換してみて自分の考え方が 180 度変わった。１日目の終わりから自分の成長を感じた。今まで相手が話し終わるまで待つのが普通だったけれど、気になった途中で質問すると話をより広げていくことができ、最終的に最初に話していたこととは一見何も関係ないようなことまで話がつながることに気づくことができた。
◆◆◆◆◆
自分がサミットに参加してよかったと思うこと
私がこのサミットで得られたことは「対話（ダイアローグ）の必要性」を学べたということです。自分の言葉をうまく話す必要は全くなくて、ただ向かい合ってじっくり考えた自分の考えを伝えることが大事だという言葉にとても感動して、自信を持てました。高校生のうちにそのことに気づけたということは非常に良いことだと自分でも実感しています。本当にありがとうございました。招いてくださり、温かく接してくださったみなさんに本当に感謝の気持ちでいっぱいです。
◆◆◆◆◆
とにかく全てが新鮮で刺激的でした！
誰かが意見を言っても一切否定せず、むしろそれを深く掘り下げていったり、誰かが今まで出なかった答えを言った時にうなずいたりしている。そういう雰囲気がとても好きでした。今まで漠然としていた地方創生についてが、このサミットを通して漠然というよりも深いものだったということがわかりました。
◆◆◆◆◆
地方創生についての考えが 180 度変わりました！
私は、今まで地方公共団体がうまく対策を行って、主体的に行動できる & 地方に興味がある人が経営政策について学んで、その土地の特色を PR すれば、自然と地方創生の問題は解決されるだろうと思っていました。でも、この３日間のディスカッション、朝活を聞いていくうちに、そんな簡単なことではなく、日本の都会民でも地元民でもどちらでも、本当に自分たちの住みやすい町（共同体）を作り出すことが大事で、それがあれば無意識というか、自然に地方創生がうまく行われていくという考えに一新したと実感しているので、本当に面白くて楽しいなと思いました。
◆◆◆◆◆
前までの地域創生のイメージと、３日間を終えた今でのイメージがガラリと変化して戸惑っている。自分は、ここに参加して目的を果たせたかどうか、微々たるものだが不安がとぐろを巻いている。でも、有意義だったと胸を張って言えるように、生かしていきたい。とても濃い３日間、楽しかった。
◆◆◆◆◆
自分になかったものをたくさん吸収することができた。今回、たくさんの面白い人たちに出会えてみんなとご縁があったことがうれしいと思えた。自分の中にあるものを全て出し切る気持ちで話をしていたけれど、それ以上のものが返ってきて、世の中にはすごい人がたくさんいて、自分はまだ知らないだけだと感じた。
自分もこういう機会をつくれる大人になりたい。

マンガでトランスボーダー Vol.4：マンガであなたとつくばと世界をつなごう！

【活動地域：茨城県つくば市】

国際室　教授　　森尾　貴広

1 事業の内容

本事業は、作品制作、企画編集、学術研究に豊富な経験をもつ本学教員、卒業生、連携関係にある茨城県在住および国内外のコミックス・アーティストによる一般市民を対象としたマンガ制作の体験型ワークショップおよび海外マンガ作家との交流を通じて、現代における国際交流・異文化体験のツールのひとつであるマンガの可能性をアピールし、大学を介した市民と地域社会、世界とのつながりを広めることを目的とする。

ワークショップ初日

2 事業の成果

令和元年９月21日から23日までの３日間、ワークショップを開催した。本ワークショップは参加者と国内外のマンガ家が集い、つくば市の古民家の環境にインスパイアされたマンガを作成することを通して、グローバルとローカルを再発見することを目指すものである。

ワークショップには市内の中学生、大学生、市民を含む20名が参加し、筑波大学卒業生のマンガ家木野陽先生、同じく横井三歩先生、芸術系の山本美希助教、カナダ・ケベック出身のジュリアン・パレ-ソレル先生、台湾出身の阿油先生、ベネズエラ出身の本学留学生イサベル・ファッチーニさんを講師にグループに分かれてマンガ制作に取り組んだ。

初日はつくば市北条の矢中の杜で、午前中は守り人さんのガイドで建物を見学した。午後はグループ毎に集まって作品のプロット作りを行った。講師と参加者が見学の中で印象に残ったことを話し合い、作品のストーリーをまとめた。

２日目は本学春日エリアのクリエイティブメディアラボでマンガの作画を行った。マンガを描くのはこれが初めてだったり、これまでマンガ・イラストレーションを描いた経験があったり、参加者のバックグラウンドは様々だったが、皆で役割を分担して全てのグループが作品を完成させた。参加者にとってはプロのマンガ家の創作現場を間近で見る良い機会となった。また、特別講演としてジュリアン先生がこれまでの創作活動や作品、影響を受けたマンガやアニメーション作品について紹介した。

２日目

終了後参加者、講師、スタッフ全員で記念撮影

３日目はさくら民家園で午前中に各グループの作品をまとめて印刷した作品集の製本体験を行った。午後はグループ毎に作品の意図や工夫した点を発表した。出来上がった作品集は各参加者に配布すると共に、矢

中の杜、さくら民家園に寄贈した。

令和２年２月 29 日、３月１日に BiVi つくばイベントスペースにて、ワークショップの原画、下書き等の展示会を行った。計画当初は参加者を交えた振り返り会を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染のリスクを考慮して展示のみとした。２日間での来場者は約 30 名であり、当日放送の茨城放送のラジオ番組で紹介された。

ワークショップ作品集の表紙
（デザイン・イラスト：木野陽先生）

3 地方自治体等との連携

本事業の実施において、ワークショップ会場の提供等、つくば市および NPO 法人“矢中の杜”の守り人の協力と連携を得た。

4 今後の展望

本事業でのマンガ制作ワークショップ形式での社会貢献モデルは、他の自治体からも注目を集め、茨城県内の自治体から地元女子中学生を対象にした、地域での女性の活躍に関するマンガワークショップの依頼があり、実現に向けて検討中である。

マンガは比較的言語に依存しない自己表現手段であり、その制作の過程でいかにして他人にものごとを伝えるかについての良いトレーニングとなる。今後外国人居住者との共生、世代間のギャップの緩和など「異文化」理解の難しさに起因する社会の問題への取組のツールとしてこのモデルを適用していきたい。

5 その他

トランスボーダー・マンガ・リサーチグループ
web ページ
http://transbordermanga.blogspot.com

高齢者コミュニティで作る産学・社会連携プロジェクト：広報誌を介した地域づくり

【活動地域：茨城県つくば市他　県南地域】

人間系　教授　　原田　悦子

1 事業の概要

みんなの使いやすさラボ（みんラボ）は 、2011 年開設以降、「モノの使いやすさ」を研究対象とした社会貢献活動を行ってきている。具体的には茨城県南地域在住の高齢者に「みんラボ会員」としてボランティア登録をしていただき、登録高齢者にモノに関する検証実験や研究、討論会などへ参加してもらう活動を定期的に実施してきている。これらの中で、みんラボの活動をもっと地域に広めたいという要望が会員から寄せられ、本事業である「みんラボ四季報」が発行されることとなった。

2 事業成果の概要

四季報は、みんラボ会員の中からボランティアとして手を挙げた「みんラボ広報の会」（2020 年３月時点で 10 名）のメンバーによって編纂されている。広報の会のメンバーは、みんラボ事務局と協力し、みんラボの活動の取材、記事の執筆・推敲・校正・印刷などの編集活動を行ってきた。その結果、2014 年の創刊号から 2019 年４月の最新号に至るまで、計 16 号にわたって、みんラボの研究活動や会員による地域貢献活動などを発信している。

図１　みんラボ広報の会の様子（共同研究棟Ａ棟にて）

図２　完成した四季報第 15 号、第 16 号

2019 年度は、みんラボ四季報第 15 号、16 号を発行した（図２）。公刊した四季報は紙媒体としての配布の他、みんラボ HP にてダウンロードもできるよう公開している。

3 地方自治体等との連携

印刷されたみんラボ四季報は、つくば市だけでなく、つくばみらい市・牛久市・土浦市・守谷市・取手市・龍ヶ崎市の市役所及び関係部署にて配布されており、また、つくば市・牛久市の社会福祉協議会やシルバー人材センター、生涯学習センターなどでも配布されている。みんラボ活動の情報提供を通して、地域の高齢者の学習意欲の向上やコミュニティの活性化などに貢献することを目指しており、読者から手紙が届くなどの反響もある。

4 今後の展望

今後も、年に２回四季報を発行できるよう、広報の会を継続的に実施していく予定である。さらに、アンケートや読者の意見を踏まえて、さらに良い紙面づくりを行っていくよう、工夫を続けていきたいと考えている。また、現在、新たな執筆メンバーも募集中であり、活動の幅を広げていくことを目指している。

博学連携による地域文化財の再生と利活用―土浦市における重要遺跡の調査とパブリック・アーケオロジーの展開―

【活動地域：茨城県土浦市】

人文社会系　准教授　　滝沢　誠

1 事業の概要

地域の文化財は、身近な歴史や文化を伝えるかけがえのない存在である。本事業では、土浦市教育委員会と連携しながら市内の重要遺跡を調査し、最新の成果を市民にわかり易く伝えるための学習会を開催するなど、パブリック・アーケオロジーの実践に努めた。

2 事業成果の概要

事業の目的に沿って、（1）市指定史跡・后塚古墳（土浦市手野町）の発掘調査、（2）市民向け説明会、（3）小学生向け学習会、（4）市民向けパンフレットの作成を行った。以上のうち、（2）については、発掘期間中の 12 月 14 日に地元住民を対象として実施し、（3）については、12 月 17 日に地元の上大津西小学校６年生を対象として実施した【写真１】。いずれも好評で、今後のさらなる充実に期待する声が多く寄せられた。（4）については、后塚古墳の発掘調査成果を平易に解説したパンフレットを 500 部作成し、土浦市の博物館や公民館に配布場所を設置した【写真２】。

3 地方自治体等との連携

上記（1）～（3）の事業は、すべて土浦市教育委員会（上高津貝塚ふるさと歴史の広場）と共同で実施した。また、現地作業や説明会の実施にあたっては、土浦市上大津公民館の協力を得た。

4 今後の展望

后塚古墳とそれに隣接する王塚古墳（市内最大の前方後円墳）については、土浦市教育委員会との共同調査として、2018 年度から４ケ年をかけて順次発掘調査を進めていくことが決定している。2020・2021 年度は王塚古墳の発掘調査が予定されており、その際にも小中学生を対象とした学習会や市民を対象とした説明会、公開講座等を企画・実施し、さらに充実を図っていきたい。また、地域文化財の意義を伝えるための企画展示を、本学の展示施設（人文社会系学術展示室）で開催することを検討していきたい。

写真１　小学生向け学習会の配付資料

写真２　后塚古墳の発掘調査成果を伝える市民向けのパンフレット

つくば市における外国人児童生徒支援体制の構築

【活動地域：茨城県つくば市】

人文社会系　准教授　　松崎　寛

1 事業の概要

近年急増する外国人児童生徒に関わる様々な問題に対応するべく、筑波大学、つくば市教育委員会、市内の小学校、市民ボランティア団体、つくば市国際交流協会等と連携し、問題を解決できる体制を整備します。

具体的には、大学生日本語支援者バンクの整備、児童の放課後学習支援スペースの開設、関係機関の職員による連絡会・勉強会の開催、などの実現に向けて、各機関が有している課題の共有と、具体的解決に向けたアイデアの立案を行います。

2 事業成果の概要

2019 年 7 月に、外国人児童生徒受入れで先駆的な試みを行っている浜松市の小中学校や多文化共生センターを見学し、担当者からお話を伺う機会を得ました。

ここで得られた知見をもとに、大学生日本語支援者バンクの整備、児童の放課後学習支援スペースの開設にむけ、筑波大学留学生および外国人研究者の「困りごと」を把握し、大学や市と共有するべく、インタビュー、アンケート調査、懇話会等を実施しました。アンケート調査や懇話会実施に際しては、全学の教職員と学生が一体となってプロジェクト型教育を行うべく、T-ACT プラン「つくば子育て家族サポートプロジェクト」を活用し、オーガナイザー学生が地域課題解決活動を通じた主体性を涵養することを目指しました。

アンケート「筑波大学留学生および家族の言語生活に関する実態調査」は、留学生の多い 10 の言語に翻訳してウェブ上で実施しました。2019 年 8 月から 12 月までで 100 件以上の回答があり、家族帯同者からは「大学内に留学生が利用できる保育所や放課後学習支援スペースが欲しい」等の声が寄せられました。

懇話会の第 1 回は 2019 年 11 月に行われ、子育てをしている中国語話者の方を対象に、生活に必要な情報や子どもの教育等（言語教育・進学について）に関して困りごとを共有する機会を提供しました。話し合いは中国語の通訳を介しつつ進めました。

大人が懇話会を行う間に子どもが遊べるキッズスペースも用意し、留学生家族と日本人学生・教職員とで、課題の解決にむけて共に考えました。

第 1 回子育て外国人家族のための懇話会チラシ

第 1 回懇話会の様子

これらの調査結果の一部は、2020 年 1 月 12 － 13 日に筑波大学で開催された第 2 回国際シンポジウム「地域社会と多文化共生」で報告され、参加した学生・教職員、学外の方々等約 170 名の参加者と情報共有及び意見交換を行いました。

第２回国際シンポジウム
「地域社会と多文化共生」での発表の様子

上記活動報告等を発信するために、「つくば日本語支援リサーチグループ」のウェブサイトを作成しました（https://tsukuba-kosodate.net/about/）。今後もサイトを通じて情報発信をしていきます。

3 地方自治体等との連携

つくば市教育局、つくば国際交流協会、市民ボランティア団体、筑波学院大学、筑波大学から構成された「つくば日本語支援プラットフォーム」を2019年４月に立ち上げ、不定期に会合を開きながら、情報共有と課題の洗い出し、そして課題解決のための実践を行ってきました。

また、2019年６月より、茨城県教育委員会、NPO団体との連携によるグローバルサポート事業へ参画し、小中高等学校における外国人児童生徒教育への支援やアドバイザー業務の実施を行ってきました。７月には筑波大学総合研究棟Ａで、認定NPO法人茨城NPOセンター・コモンズ主催、一般参加無料の講演会「DLAの学校現場での活用」が行われ、外国人児童生徒のためのJSL対話型アセスメント「DLA」を学校現場で活用する方法について学びました。

これら様々な関係者・関係組織が連携して、組織的にプロジェクトに取り組めるようになったことの意義は非常に大きく、今後、外国人児童生徒、日本人児童生徒、日本人大学生、留学生、学校教員、市職員、地域住民等々、様々な層への波及効果が期待できます。

4 今後の展望

懇話会等、2019年度末に実施を予定した計画の一部が、新型コロナウイルスによるイベント自粛により中止・延期となったため、2020年度は、インターネットを通じた支援なども視野に入れた活動を展開させていきたいと考えています。

具体的には、以下の２点です。

１）子育て家族のための懇話会の定期的実施

つくばで子育てをしている外国の方々に交流の場を提供するイベントとして、懇話会の第一回が行われましたが、継続的実施を希望する参加家族は多く、市民活動の担い手としてこのような活動に参画する場こそが彼らのニーズなのだということが実感できました。

今後、定期的に家族同伴での懇話会を実施し、子育てに関する情報共有を行うと同時に、児童の放課後学習支援スペースの開設に向けた試行を積み上げ、イベント協力者である大学生のネットワークを拡充して、「日本語支援者バンク」を整備することも進めていきたいと考えています。

２）プレスクールの検討

現在、つくば市役所の市民窓口課では、住民登録に来た外国人に学齢期の児童生徒がいた場合でも特に就学説明は行わず、自発的に希望した家族だけが学務課で就学手続きを行っています。そこで、他自治体の取り組みを参考に実施の計画を立て、市民窓口課と学務課の間に入って保護者への聞き取りや進路相談を行い、児童生徒の日本語支援などのプレクラスが行える可能性について検討し、効果的な支援策の策定を行う予定です。具体的には、つくば市国際交流協会と連携協力し、就学相談や進路希望などの聞き取り調査を行い、子育て外国人家族が適切に就学手続きできる説明会を実施します。

Hack My Tsukuba2019
～市民の市民による市民のための問題解決～

【活動地域：茨城県つくば市】

システム情報系　教授　　川島　宏一

1 事業の概要

市民が、地域課題に向き合い、データ分析を通じてより良い地域社会をつくるための方策を検討し、解決策を考え、自分事として実現に取り組む運動（Civic Hack）をつくば市において展開する。具体的には、自治体職員と市民・市民団体、エンジニア、学生、企業等が協働する「場（イベント名：Hack My Tsukuba)」をつくば市とともに設定し、各主体の問題意識の共有、データを用いた問題の可視化、解決策の検討と具体化（プロトタイプの製作）などに取り組む。

自治体は公開されていない公共データや現在抱えている地域課題を公開し、市民・企業等は課題や課題解決のためのアイディア・技術などを提供する。地域課題に関係するステークホルダーの埋もれている資源の発見・組み合わせの試行錯誤によって、地域の身近な課題について、市民自らが考え、解決していける社会づくりに貢献する。

2 事業成果の概要

2019 年度は、つくば市が重要政策課題のひとつとして掲げる「誰もが取り残されず、自分らしく生きるまち」を全体テーマとして、「高齢者福祉」をサブテーマとして、以下、全3回（7月 27 日（土）、10 月 26 日（土）、１月 25 日（土））のワークショップを開催した。

多様な参加者から成るイベント終了時の集合写真

筑波大学大学院社会工学専攻が提供するファシリテーター育成プログラム「地域課題解決ファシリテーター育成」を履修する学生が、メインファシリテーターのほか、進行補助、広報、資料作成、調達の業務を分担し、つくば市職員と共同で Hack My Tsukuba の運営に携わった。回を重ねる毎に応募者人数が増え、本事業の意義が浸透してきていることが感じられる。

3 地方自治体等との連携

本事業はつくば市政策イノベーション部情報政策課との共催である。情報政策課が、Hack My Tsukuba の運営とともに、課題の可視化や問題解決に必要とされる様々な公共データの公開を推進し、大学と共に市民による地域課題解決の後押しをした。また、今回のサブテーマ「高齢者福祉」に関連の深い、市の関連部署担当職員による事前打合せや当日のグループディスカッションへの参加があった。

4 今後の展望

全３回のワークショップを通じて、年齢・性別・職業が多様な参加者間での議論や解決策の検討が行われた。これにより、参加した市民には、地域社会の一員としての課題を共有し、課題解決に自分事として取り組むという意識が醸成された。また、つくば市にとっても、市民の問題意識や地域社会のあるべき姿について、直接市民から意見を聞ける貴重な場となった。

全３回を通して同じ参加者が継続的な検討を行うことを想定したが、実際は各回で参加者が異なった。同じメンバーの参加を奨励すること、各回で参加者が異なった場合でも円滑に進むようにすることが課題である。そのため、次年度は第１回イベント時に年間日程を提示し、同じメンバーの参加を求める。また、各回で参加者が異なっても時間内に解決策の提案まで到達できるよう、参加者の経験やスキルなど属性を考慮したグループメンバー構成を行う必要がある。

盆 LIVE2019

【活動地域：茨城県つくば市】

人間学群心理学類　　阿部　光多

1 事業の概要

つくば市内に住む大学生、留学生、家族といった様々な人々の交流の場を作ることを目的としている。盆踊りの振り付けを古典の曲のみならず、J-POP といった現代の曲にも合わせて踊るという新しいお祭りを開催する。他にも国際色豊かな店舗の出店や、様々なパフォーマーを呼びパフォーマンスの披露を行ってもらうことを考えている。例年家族連れが多く来場してくださるので、今回は子供向けの曲やパフォーマンスを多く取り入れる。

2 事業成果の概要

本事業は令和元年９月 21 日（土）に、研究学園駅前公園にて開催した。来場者数は概算で 1,100 名ほどを記録した。

本番当日は一部雨の予報が出ていたが、無事に予定通りに開催することができた。今年は縁日が４店舗、キッチンカーが６店舗、やぐらを囲んだ。開場から途切れることなく来場者が訪れ、家族連れを中心に地域の方々が多く見られた印象である。

小学生や中学生の来場が増加傾向にあることを鑑み、本年度は子ども向けコンテンツの充実を意識して会場作りを行った。パフォーマンスは、吉瀬三日月囃子保存会の方々や、フォルクローレワンマンバンドの Rio de 半仁門様など、地域で活躍されているパフォーマーを招いた。また、筑波大学ヒーローアクション同好会やヲタ芸サークル・The Empire of TSUKUBA といった筑波大学所属団体の方々にも来ていただき、どのパフォーマンスも迫力満点で楽しいものだった。子どもたちをはじめ、来場者の方々も非常に楽しんでいる様子だった。

盆踊りの時間は三部から成り、第一部では伝統的な盆踊り、第二部では「Happiness（嵐）」や「パプリカ（Foorin）」など子どもに人気のポップスに合わせた盆踊り、第三部では様々なジャンルの楽曲に合わせて、オリジナルの振り付けで盆踊りを行った。部が進むにつれて会場は盛り上がりを見せ、特に第三部では、夏の夜と煌びやかに灯るやぐらのコントラストが非常に美しく、元気に楽しく踊る方々の姿が印象的だった。音楽や踊りの経験が無くても盆踊りの輪にとび込み、子どもからお年寄りまで年代関係なく交流する様子が見られたことは、実行委員会として感慨無量である。

この度の開催にあたって、ご協力いただいた多くの皆様に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

盆踊り第三部　やぐらを囲む人々

3 地方自治体等との連携

今回の開催にあたり、つくば市とつくば市教育委員会から後援を頂いた。誠にありがとうございました。

4 今後の展望

今回は特に家族連れに向けたコンテンツを多く盛り込んだが、今後は留学生などの外国籍の住民への広報およびコンテンツにも力を入れていきたい。また、駐車場案内の不足など、当日の対応が不十分だった点もあり、以降の課題としていく。つくばに根差したお祭りにできるよう、より一層努力していく次第である。

多様な人々が食でつながり健康になる多文化共生ガーデン

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系　助教　　新保　奈穂美

1 事業の概要

筑波大学構内ミューズガーデンにおいて、学内外の外国ルーツの人々を含めた地域住民とともに野菜や果物を皆で育て、食の時間を共有する。これにより日常的な交流を生み出し、相互理解のきっかけを作る。本年度は新たに体育専門学類、特に「つくばアスリートレストラン（TAR)」所属学生と連携し、人々の食への意識啓発・心身の健康増進を図る。以上により、地域における多様な人々が食でつながり、健康になる共生社会の実現に寄与する。

2 事業成果の概要

３月に TAR とともに植え付けたジャガイモを用いて５月に収穫と調理のイベントを筑波大学の学生寮グローバルビレッジにて開催した。中国やエジプト、日本出身の学生が TAR の指導のもとジャガイモを様々に調理し、楽しい交流と学びのときを過ごした。

TAR とのジャガイモ収穫・調理イベントの様子

その後は夏野菜を栽培し、参加者は日常的にとれる収穫物を材料として、出身国あるいは日本ならではの方法で調理した。調理の成果は SNS で共有された。

また、春にガーデンに立ち寄った地域の方がお裾分けで植えつけてくださったサツマイモを、11 月に収穫し、同時にバレーボール会を行うという企画がエジプト出身の学生中心で開かれた。食に関する活動の傍ら運動を行うことにより、参加者は心身ともにリフレッシュの時間を楽しむことができたと思われる。

収穫したサツマイモとバレーボールの様子

3 地方自治体等との連携

市内の国際交流関係団体や公的施設へのリーフレット配布などの広報協力依頼を予定していたが、令和元年度は都合により実施できなかった。結果として主に学生・教職員やその友人・家族のみの活動となってしまった。地域の様々な人を巻き込むために今後は積極的な連携が必要であると考えている。

4 今後の展望

新型コロナウイルスへの対応によりプロジェクト実施の難しさはあるが、日常的に通い身体を動かすことのできる緑豊かなオープンスペースとしての機能は重要であることから、状況を見ながら様々な文化・世代の人々を包摂する地域交流の拠点としてミューズガーデンを今後も活用し、多文化共生ガーデンプロジェクトを発展させていきたいと考えている。また、つくば市が実施している研究者による子どもの教育支援プロジェクト「つくば STEAM コンパス」などと連携し、地域の小学生が取り組む自由研究の場の提供などにも取り組みたい。

5 その他

活動にご興味のある方は Facebook の Muse Garden ページやメール（musegarden.tsukuba[at]gmail.com（[at] を @ に変換））などからご連絡いただけますと幸いです。

「いもりの里」をモデル拠点とした谷津田・里山の復元・維持管理ネットワークの継続的発展 2019

【活動地域：茨城県取手市】

生命環境系　助教　　丸尾　文昭

1 事業の概要

「いもりの里」では、関東平野の典型的な荒廃した谷津田・里山（取手市の耕作放棄地）を舞台に、地域住民と行政、学術サイドが協働して農村・都市一体型の維持管理ネットワークの構築に成功し、イモリ（絶滅が心配される水生動物）も棲める上質の自然環境を復元しながら、生命環境教育・農業体験・地域産業振興活動などの総合プログラムを実践している。本事業では「いもりの里」（地域の宝／サンクチュアリ）をモデル拠点として活用・維持しながら、周辺地域への拡充計画策定や周辺小学校での科学体験学習を支援する。

2 事業成果の概要

これまでの活動を通じ、地域住民サイドからは「いもりの里」の継続活用と維持継承を望む声が、行政サイドからは類似の事業展開を探る声が強いことが分かった。そこで初期整備を終えた「いもりの里」をモデル拠点として本格的に活用・維持しながら、科学学習支援や周辺地域への拡充計画策定支援・提言を継続的に実践している。

田植え・稲刈り・収穫祭等の様々なイベントや生命環境関連の様々な総合学習プログラムは、いもりの里協議会が中心となって、行政、教育委員会・学校、地域住民の協力も得ながら、年間 11 回開催した。

表．令和元年度 いもりの里年間行事

開催日	内容	参加人数
4/14(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 草もち作り、春の花・いもり観察	44名
5/5(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 どろんこ田んぼ運動会、ザリガニ釣り	48名
5/26(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 田植え、田んぼの生き物観察	57名
6/16(日)	取手いもりの里　生き物観察会 土壌生物観察、いもり観察	57名
7/27(土)	取手いもりの里　星空の下の科学教室 講演会、灯火観察	31名
8/18(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 竹細工(竹水鉄砲)、ザリガニ釣り(外来生物について)	9名
9/15(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 稲刈り、いもり観察	70名
10/20(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 収穫祭(主催：貝塚・上高井地区農村環境活用推進協議会)	64名
11/10(日)	「いもりの里」10周年記念 市民公開講座(取手ウェルネスプラザ) (イモリネットワーク、イモリ型の臓器再生フォーラム共催)	82名
12/15(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 クリスマスリースつくり	30名
1/26(日)	取手いもりの里　生き物観察会 鳥の観察	13名
3/22(日)	取手いもりの里　谷津田・里山体験 デイキャンプ	雨天中止
2/16(日)	イモリ学習会(筑波大学) 再生の不思議、イモリの卵や幼生観察、イモリ幼生の飼育法	新型コロナ対応で中止

3 地方自治体等との連携

取手市役所まちづくり振興部を中心に「いもりの里」の候補地選定時以来 13 年にわたり支援をいただいている。取手市から地元（いもりの里協議会）への公募補助金が継続的に採択されているほか、イベント運営スタッフへの市役所職員の方々の参加、有害外来生物（アライグマ）の駆除など、地域住民との3者間で連携した円滑な協力体制が確立している。2019 年 11 月 10 日に「いもりの里」事業 10 周年記念の市民公開講座を取手市の施設で実施した。

4 今後の展望

小学校児童を中心に家庭でのイモリ幼生飼育体験プログラムも数年に渡り提供しており、卵から成体イモリまで立派に育て上げて、いもりの里に放流するまでになっている。今後は、イモリネットワーク・ジュニアとして拡充し、「いもりの里」を生命環境教育の拠点としてもさらに発展させていく。また、世界で唯一のアカハライモリ・ストックセンターとしての役割（Nature Protocols 6:593-599, 600-608, 2011 ほかに記載）も益々重要になってくると思われる。イモリ野外生態観察場で実施してきた追跡調査の知見を生かし、繁殖環境の整備にも力を入れている。

5 その他

ポートフォリオはイモリネットワーク (Japan Newt Research Community) の Web ページに随時掲載

http://imori-net.org/

温帯域サンゴの重要性の普及啓発に向けた産学連携活動

【活動地域：静岡県下田市】

生命環境系　助教　　アゴスティーニ　シルバン

1 事業の内容

地球温暖化に伴う水温上昇は、沿岸域の生物群集に大きな変化をもたらしている。日本周辺のほとんどを占める温帯域では、大型海藻の藻場が卓越しているが、一般的に高水温に海藻は脆弱であり、地球温暖化の進行によって負の影響を受ける。一方でサンゴは温暖な海域を好み、日本周辺では沖縄に大規模なサンゴ礁を形成する。このような水温に対する感受性の違いによって、近い将来、温帯域の藻場群集はサンゴ群落へ変化すると予測されている。海藻の減少は、アワビやサザエなどの漁獲資源を減少させる一方で、サンゴの増加がダイビング産業の活性化などを引き起こす可能性が指摘されている。しかし、サンゴは熱帯海域に生息するという意識は根強く、温帯域におけるサンゴの存在や重要性はほとんど知られていないのが現状である。

地球温暖化の深刻化が不可避な状況になりつつある中、我々人間社会が変化する生態系に適応していくことが求められている。温帯域においては、藻場からサンゴ群落の変化に伴い、海に携わる人々はライフスタイルを変えていかなければならない。そのためには、海を基幹とする産業に携わる市民を大規模に巻き込み、温帯域に関するサンゴに関する知識や保全活動に対して普及啓発を行っていくことが不可欠である。

2 事業の成果

2.1. 温帯域の海洋生態系に関する市民向けイベント

城ケ崎海洋公園で一般向けのセミナーを開催した。元東海大学教授の横地先生により伊豆のサンゴの特色、国立環境研究所の北野研究員は伊豆のサンゴの分類、筑波大学のアゴスティーニ助教は温暖化や海洋酸性化による伊豆の海の生態系の将来を紹介した。

サンゴウィーク 2020 年では下田海中水族館でのパネルおよび伊豆に生息しているサンゴの展示を行っている。子供でも分かる質問式でサンゴの基本情報を紹介し、水族館と共同で行った調査結果を紹介している。伊豆で多く見られるキクメイシ、ニホンアワサンゴやエンタクミドリイシの生きた個体も展示し、ダークライトによるサンゴの蛍光色の観察出来る水槽が設置されている。

図１：横地先生（元東海大学教授）による発表
2019 年8月 24 日@城ケ崎海洋公園

図２：下田海中水族館でのパネル及びサンゴ展示の一部
（展示期間：2020 年2月 22 日～3月 31 日）

2.2. 伊豆半島における市民との共同サンゴ調査

地元のダイビングショップ、下田海中水族館、江の島水族館や漁協の協力を得て、ダイビングインストラクター等とともに伊豆周辺で潜水し、サンゴの調査を実施した。菖蒲沢など東伊豆で大型海藻が多い温帯海域的な生態系から西伊豆町田子など東伊豆でサンゴが多く生息している熱帯化が進行中な生態系の観察と記録ができた。

図３：南伊豆町下流で行った共同調査。下流では磯焼により大型海藻が減少している。

調査地点	サンゴの有無
伊東市川奈	有（中）
伊東市城ケ崎	有（少）
下田市須崎	有（少）
下田市大浦	有（少）
南伊豆町下流	無
南伊豆町中木	有（多）
南伊豆町妻良	有（多）
西伊豆町安良里	有（多）
西伊豆町田子	有（多）

2.3. 無料動画と芸術家による伊豆の水中形式の撮影

伊豆周辺生態系が現在変わりゆく中であっても多くの方が自分の目で観察できないため、動画や写真を利用して現在の伊豆の生態系を紹介することにした。水中カメラマンの中川西（SAI.LCC）とフランスの芸術家フロック教授（European Academy of Art in Brittany）と共に東伊豆の温帯生態系や西伊豆の熱帯化の現状を撮影し、できた動画をYouTube で発信した（URL：https://youtu.be/s9NORtCGZxc）。水族館で上映し、今後は個展を実施する予定である。

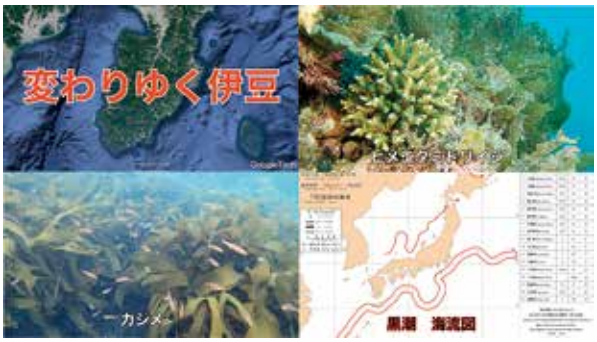


図４：SAI.LCC と共に作成した動画のスクリーンショット
動画 URL：https://youtu.be/s9NORtCGZxc

図５：下田市でホンダワラ、カジメなどの大型海藻がフタマタハマサンゴと共存している。写真：Nicolas Floc'h

3 地方自治体等との連携

NPO　伊豆未来塾
下田海中水族館
江の島水族館
中木マリンセンター
伊豆海洋公園
川奈日和
菖蒲沢ダイビングセンター
黄金崎ダイビングセンター
NPO　OWS
SAI.LCC

4 今後の展望

新型コロナウイルスのため残念ながら江の島水族館と海中水族館で予定していたワークショップやセミナーが中止になったため、来年のサンゴウィークに向けてイベントを開催、または調査を続ける予定である。

環境マイスターの育成による地域環境教育の推進および環境保全事業

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系　教授　　上條　隆志

1 事業の概要

本プロジェクトは、環境に対する正しい知識と技能を身につけ、地域社会において環境教育や環境保全の指導者となる市民を育成する事業である。つくば市の水･土･生物などの自然環境、文化･都市環境を習得テーマとし、地域特性の高い環境教育を行う。本事業により認定を受けた環境マイスターはつくば市や NPO が実施する各種事業の中核となって活躍し、市民の環境意識向上及び環境保全活動への積極的な参加に努めるようになる。

環境マイスター認定希望者の最終発表会（2020. 2.2）

2 事業成果の概要

今年度も昨年度と引き続き「SDGs」をテーマとしたマイスター講座を以下の日程で行った。昨年度より、１年で環境マイスターを育成する新たなプログラムを実施しているが今年度も同様な日程で進めた。書類審査で合格した市民の方の面接を実施し、面接試験に合格した２名の市民の方を対象にして本講座を実施した。

第１回　講義「生物多様性とその保全」
（講師：上條隆志氏）6月 16 日（日）
第２回　研究計画発表
（講師：田村憲司氏）7月 28 日（日）
第３回　筑波山の植生観察
（講師：上條隆志氏）8月 18 日（日）
第４回　筑波山の土壌観察
（講師：田村憲司氏）9月 29 日（日）
第５回　研究発表
（講師：上條隆志氏）10 月 27 日（日）
環境マイスタースキルアップ講座：
生物多様性保全戦略作り
（講師：上條隆志氏・田瀬則雄氏）2月2日（日）

3 地方自治体との連携

本事業は、つくば市と筑波大学との連携事業であり、受講生のうち、一定の条件を満たし審査に合格した者は、環境マイスター認定証を授与される。

4 今後の展望

本事業は、開始から環境マイスター認定証取得者は 28 名となり、着実に成果を上げてきている。つくば市側の所管部局である環境政策課も、環境マイスター授与者の活用方法について、積極的な活用を進めている。現在、当事業修了者が中心となって立ち上げた、環境マイスターの会の活動も里山ウォークなど定例的に行われ、つくば市における環境関連取り組みの推進役になっている。さらに、筑波山のわき水マップづくりに対して、環境マイスターが尽力している。本事業が本学の社会連携活動の一翼を担うものとしてより発展することが期待されている。

5 その他

本年度、2020 年３月 30 日に本学学長応接室において、学長およびつくば市の五十嵐市長ご列席のもと、環境マイスターの認定証授与式を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、中止となった。

摂食障害の予防、早期発見・早期治療、医療連携、社会復帰を目的とした総合的な疾患啓発と疾患教育

【活動地域：茨城県】

附属病院　病院講師　　塚田　恵鯉子

1 事業の概要

摂食障害は難治の慢性疾患で、時に死に至る深刻な疾患です。しかし、早期発見・治療、適切な支援により予後は改善します。残念ながら、疾患の認知度は低く、学校と医療機関、医療機関間での連携も困難な状況です。そのため、県内の精神科や小児科を対象として講演会を行い、さらに養護教諭との勉強会を開催しています。また、摂食障害の理解を深める目的で、摂食障害のアニメーションを作成しました。さらに、一般の方を対象とした、共食に関するワークショップを開催し、食事を通した親子や家族間でのコミュニケーションを促すように努めています。このように、多方面から摂食障害に関する啓発や連携の強化を図る活動を行っています。

2 事業成果の概要

1）つくば地区勉強会

つくば地区で養護教諭との勉強会を定期的に開催しています。症例検討会やグループワークを行い、当グループ監修で各養護教諭が生徒や家族に配布する摂食障害に関するリーフレットを作成しています。

2）医療機関、教育機関での講演

2019年9月6日には精神科病院のとよさと病院、2020年2月17日は土浦共同病院の小児科、2020年2月23日に鹿島病院にて、看護師と摂食障害の一般的な知識、入院治療、対応方法について講演を行いました。今後も症例検討会などを開催し医療連携を強めていきます。

3）アニメーションの製作

摂食障害の理解を深めるため、疾患の症状などについて、子供にも理解しやすく、親しみやすいアニメーションを制作しました。講演会や勉強会などで使用します。

4）共食のワークショップ

「食」とコミュニケーションのタイトルで、共食の重要性について、親子で学び、体験するワークショップを行いました。

5）神経性やせ症の家族教室・家族交流会

定期的に神経性やせ症の家族教室を行い、2019年11月2日に、第1回神経性やせ症の家族教室・家族交流会を開催し21名のご家族が参加されました。

（上；つくば地区勉強会、土浦共同病院での講演会、下；鹿島病院での講演会、共食のワークショップ）

（アニメーション）

3 地方自治体との連携

講演会、勉強会、ワークショップを通じて、一般の方、医療機関、学校への疾患啓発と連携強化を行っています。

4 今後の展望

Webなどを利用して、より幅広い地域との連携を強固にします。アニメーションや絵本、動画などを作成し、手軽にアクセスでき、理解しやすい疾患啓発を行います。食やアートセラピーなどのワークショップを開催し、多方面から精神面への理解を促す体制を作ります。

5 その他

我々の活動が広がり、地域社会の方々の精神面への関心を高め、ひいては、すべての人のメンタルヘルスの向上に寄与すると確信しています。

医療依存度の高い術後遠隔期の患児・家族への支援 ～心臓病とたたかう子供たちを夢のキャンプ地へ 2019 ～

【活動地域：北海道滝川市】

附属病院　看護師　　柿本　静香

1 事業の内容

昨今小児医療水準の向上により難病の子ども達の多くの命が救われるようになった一方で、病気や障害を抱えながら生活する『医療依存度の高い』子どもたちや家族が年々増加している。特に生まれつき重症な心臓病の患児は、心臓の根治手術を行っても術後の遺残病変や合併症のために医療的ケアに頼らざるを得ないケースが少なくない。しかしながら医療ケア度の高い子ども達を支える社会的サービスや施設は十分に整備されていないのが実状である。特に重症な心臓病患児は、小さな頃から普通の子ども達と同じように自分の病気や治療のことを気にせず外で遊ぶ機会が制限されていることが多く、そんな活動範囲が限られた心臓病の子ども達に、医療ケア付きのキャンプ場を訪れてもらい、日常の緊張感から解放された大自然の空間で、心臓病をかかえる同じ境遇の友達との大切な時間や貴重な思い出を作ってもらうと共に、子ども自らの病気への理解・知識の習得を促し、新しい世界への可能性を見出してもらう事を目的に本活動を開催した。

夏休み期間中（3泊4日）に難病と闘っている子どものために特別に配慮された医療ケア付きキャンプ地へ8名の重症心臓病児（乳幼児期に複雑な心臓手術をうけた9～ 15 歳の患児）を無償で招待した。

2 事業の成果

【現地での活動内容】

◆日中：野外での乗馬体験・野菜の収穫体験・アーチェリー体験・森探検…等（非日常的な体験中心に）

◆夜間：患児…心臓病の基礎的知識と理解を促す勉強会・自己体調管理（病気からの自立への第一歩として）

【安全対策・健康管理】

当院からボランティアで参加した医師・看護師・医学生・看護学生と事前に専門研修をうけた現地スタッフとの合同チームで全行程を安全に管理・運営した。キャンプ場は、バリアフリーのデザイン設計で、キャンプ中の医療ケアや服薬の際に利用可能な保健室も設備されており、全期間中に体調不良を生じた参加者はおらず有害事象なく全日程を終了することが出来た。

本企画に参加した子どもからは、

◆「飛行機や馬に人生で初めて乗れてうれしかった」

◆「自分以外にも同じ心臓病の人はいるから、あまり気にしなくて良いと知ることが出来た」

◆「毎日体調管理すると自分の身体の変化にすぐ気づけてよいなあと思った」

というような、心臓病と闘う子ども達だからこそ分かち合える交流や思い出が経験できたと、想いがこみ上げ万感胸にせまる声が数多くきかれた。日頃味わいにくい『新しい出会いや体験、同じ病気をもった子ども間での絆・交流、生きる力や希望の生成…』を実体験することで、参加者の通学・出産・就職・結婚といった将来の裾野を開くトリガーを引くことができた。

また日常の緊張感から解放された大自然の空間だからこそ浮き彫りになりやすい医療依存度の高い患児・保護者の抱く悩みや課題を描出することができ、難病の患児に対する地域施設や医療サービスを統括する地方自治体へ Feedback 可能な貴重な情報を得ることが出来た。

本企画に参加した子ども達・その家族から得られたデータをもとに検討した総合的な分析結果として、下記５点の重要性を認識することが出来た。

① 年齢相応の心臓病の理解・認識の重要性
② 体系的な学修とは異なる自律的な学びの必要性
③ 心臓病を抱えながら日常生活に順応するための意識改革
④ 心を豊潤にする情操教育の大事さ
⑤ 心臓病の子どもを持つ親と子の各々からの自立の大切さ

③ 地方自治体等との連携

キャンプ中の安全対策の一環として、緊急時に近隣の市立病院で非常勤医師として登録された当院医師が緊急初期対応可能な連携体制を整備した。

④ 今後の展望

子供や家族から得られたデータを客観的立場で集積・解析し、難病の子供と家族を支える新たなプログラミングツールの開発を探ると共に、患児とその家族が抱える課題や特徴を多系統的側面から分析する事で医療ケアの必要な子供や家族への地域生活支援サービス制度の変革につながりうる基盤を構築していきたい。

★平成31年度 筑波大学社会貢献プロジェクト★
医療依存度の高い術後遠隔期の患児・家族への支援
心臓病と闘う子ども達を夢のキャンプ地へ
2019
2019
8/5(月)~8(木)
3泊4日 参加費無料
北海道滝川市丸加高原
「そらぷちキッズキャンプ」
自然の中で思いっきり
チビッ子だけの大冒険。
馬のお出迎え
馬プログラム(馬車搭乗＆乗馬体験)
ミニアーチェリー大会
ツリーハウス探検
そと遊び(芝生で遊ぼう)
収穫体験

医療依存度の高い術後遠隔期の患児・家族への支援

心臓病と闘う子ども達を夢のキャンプ地へ 2019

★平成31年度 筑波大学社会貢献プロジェクト★

自然の中で思いっきり外で遊ぼう!!

「そらぷちキッズキャンプ」は、北海道滝川市丸加高原にある、病気とたたかう子どもたちのために特別に配慮された**医療ケア付自然体験施設**です。

日常の緊張感から解放された大自然の空間で、馬プログラムや森の探検など、さまざまな遊びを病気や治療のことを気にせずに貴重な体験をしてもらいます。

北海道の大自然に包まれて、家族みんなで楽しい「思い出」をつくりましょう!

募集要項

対象者：心臓疾患を経験している子ども（年齢は問いません）

人　数：8名

日　時：2019/8/5(月)～8/8(木)

場　所：そらぷちキッズキャンプ（〒079-0461 北海道滝川市江部乙町丸加高原4264-1）

主な活動内容：そと遊び・乗馬体験・収穫体験・森探検（ツリーハウス）

参加条件

○病状が安定し胸痛やチアノーゼなど病態のコントロールがつき、飛行機での移動が可能であること

○病気について、年齢や状況に合わせた説明を本人にしていること

○主治医の承諾が得られること
※全過程で医師・看護師と研修を重ねた現地スタッフ・ボランティアが参加者のサポートを行います。

○キャンプ1ヶ月前には、退院し（一時退院含む）通園・通学していること

○テレビ、新聞などに映ってもよいこと（ニュース等の取材の可能性あり）

○キャンプ前1週間に感染症に罹った場合は、キャンプでの感染拡大を防止するため、参加を見合わせていただきます

参加費用：無料（3泊4日の食費・宿泊費を含む）

自宅から集合／解散場所（筑波大学附属病院）までの交通費は、各自ご負担となります

お申込み・お問合せ等の連絡先

つくばキッズメディカルユニバーシティ

〒305-8575　茨城県つくば市天王台1-1-1　筑波大学心臓血管外科内

Tel：029-853-3097（担当 … 看護師：笠原恵・田部衣里香・千葉里子
医　師：山定公美絵・奥脇一・髙橋実穂・松原宗明）

発達障害のある高校生向け大学生１日体験講座 ～大学生になる自分を研究しよう～

【活動地域：茨城県つくば市】

人間系　准教授　　佐々木　銀河

1 事業の内容

高等学校における発達障害等の困難のある生徒の在籍割合は約 2.2% と推計されています（文部科学省, 2014）。高校から大学生活の違いとして、自由度の高い履修計画、授業内容の高度化、主体的な行動の要請などがあり、高校までは適応していた生徒が大学生活特有の課題に対処することが難しく、不適応になる場合も少なくありません。本事業では、筑波大学ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター（以下、DAC センター）と茨城県、つくば市の協力を得て、大学進学を希望する発達障害の高校生対象の大学生１日体験講座を開催しました。発達障害のある高校生が夢をもって大学進学を選択できるように、大学生・大学生活とは何かを理解すること、また、どんな大学に行っても必要となる「自己理解」を促すことを目的としたアプリケーションの体験や特性研究を行いました。

2 事業の成果

本講座では高校生１人に筑波大学生１人がメンターとして１日一緒に行動することで高校生の疑問にすぐに答えられるようにしました。保護者の方は後方で様子を見ることができ、保護者の方が現代の大学生活を理解するきっかけになるようにしました。講座は１コマ 50 分の枠組みで１～４時限目で構成しました。

【１時限目：模擬講義「発達障害と大学生活」】

発達障害のある大学１年生がどのような大学生活を送っているかを知るとともに、模擬講義を受けながらノート・メモの取り方を学び、大学での履修計画を実際に立てる演習を行いました。模擬講義の中では、発達障害のある学生が受験から入学、在学中に困ることや大学特有の仕組み（学部選択、シラバス、履修、ゼミなど）を筑波大学の教員が講義形式で説明しました。模擬講義では実際にレジュメにメモを取る練習を行い、高校生が書いたメモに対して筑波大生メンターからアドバイスをしたり、実際の大学生活についても情報提供しました。履修計画を立てる演習では実際の筑波大学の授業シラバスを用いて、１年次に取るべき授業の履修計画を考えました。用いる授業の内容を幅広い専門科目にすることで、参加した高校生の興味・関心に沿った履修計画を立てる機会となりました。

高校生からは「大学生のような感じがした」「授業の形式や単位についてなど初めて知ることが多かった」、保護者の方からは「講義内で授業カリキュラムを作成するシミュレーションがイメージで分かったので良かった」「大学生になった時の細かな対処法が今から知れて安心した」などの感想がありました。

模擬講義の様子

【２時限目：筑波大生メンターによる大学生活の体験談（高校生）／大学での支援体制の説明（保護者）】

発達障害のある卒業生をゲストとしてお招きして、入学のきっかけや大学生活で困ったこと、大学入学前にできると良かったことなどをお話しいただきました。その後、高校生とメンターが大学生活について少人数で話す機会を設けました。高校生からは人間見解など素朴な疑問や質問が出て、メンターから大学生ならではのリアルな生活の様子について高校生と情報を共有する機会となりました。併行して、保護者の方を対象に、DAC センターの障害学生支援担当スタッフによる入試での合理的配慮や大学での支援体制の説明を行いました。

大学生活の体験談の様子

高校生からは「障害を持った人の生き方を知れた」「学校での困りごとを共有する機会がなかったので新しい発見もできた」、保護者の方からは「受験時の合理的配慮についてもっと調べたいと思った」「どのような支援があるのか分かってよかった」「保護者から離れたことで色々聞けたことが子どもにとってよかったと思う」などの感想がありました。

【3時限目：自分の特性を理解・共有するアプリの説明・体験】

午前中は大学生活を理解する目的のプログラムで、午後はどの大学でも求められる「自己理解」をテーマに自分の特性を理解・共有するアプリケーションの説明･体験を行いました。特に、自分の特性（得意･苦手）を整理する方法や苦手なことへの対処法のアイデアを知り、自分の特性を他の人に伝えることについて考えることを目的としました。筑波大学で開発している自己理解サポートアプリ「マイメモ」を活用して、高校生が自分の得意なこと・苦手なことをスマートフォン等から簡単に登録して整理する方法を伝えました。

【4時限目：大学生になる自分の特性研究】

3時限目に引き続き、「マイメモ」を活用して、高校生が得意なこと・苦手なこと・対処法をメンターと一緒に考えました。特に、得意なことが浮かびにくい際に、どうやったら思い浮かべられるのか教員からヒントを示しながら、高校生が自分の特性を考える（研究する）場としました。苦手なことへの対処法については、DAC センターで開発している支援情報配信サービス「Learning Support Book」を活用して、発達障害のある方が実際に行っている工夫や対処法などを参照しながら、自分なりの対処法のアイデアを探しました。

高校生からは「全てのアプリが良いと思った。これがあると便利だと思うものばかりだった」「自分のことを理解する良い機会だった。特性がどちらに転ぶのか自分次第で変わるということを学べた」、保護者の方からは「家で使ってみたい」「普段、自分を見つめ直すということがないので、今日、自分の得意・不得意を考えるきっかけになった」などの感想がありました。

【講座全体を通して】

講座全体を通して、参加した高校生からは「話としてとても興味深かった。大学生の生活が分かったり、大学の研究についても良い話が聞けた。理解してくれる人がいることも分かった」、保護者の方からは「大学入試にあたり、前もって必要な情報を得ることができた」「メンターさんとの相性がよかったようで、とても楽しそうで大学生活や特性との共生について前向きに考えられたと思う」などの感想があり、非常に高い満足度となりました。筑波大生メンターにとっても「活発にコミュニケーションがとれた」「高校生と深い会話ができてよかった」などの感想があり、現役の大学生にとっても高校生との交流で新たな経験ができました。

午後のアプリ体験の様子

3 地方自治体等との連携

本事業は茨城県教育委員会・つくば市の後援により、第1回（夏）を 2019 年8月 25 日（高校生 14 名と同伴者 17 名）、第2回（冬）を 2020 年2月8日（高校生7名と同伴者8名）に実施し、延べ 46 名が参加しました。

4 今後の展望

今後は茨城県やつくば市のほかに、関東圏の自治体（東京都等）と連携をして、講座の実施範囲を拡大していきたいです。また、講座参加者の継続的なフォローアップを通じて、実際の大学進学後の変化についても調査し、講座の実施内容に反映させていきたいです。

5 その他

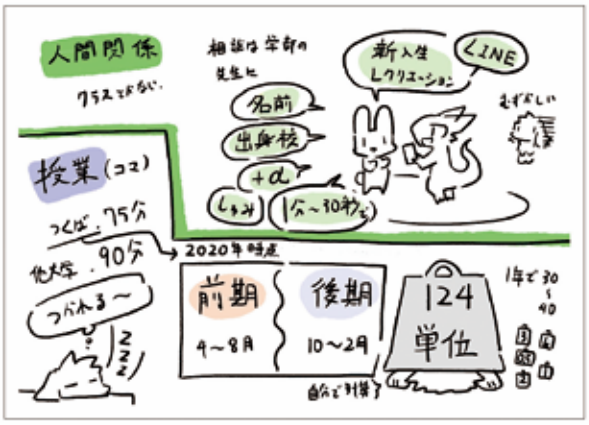
発達障害当事者による当日の講座の様子についてのマンガでの記録を添付します。

発達障害のある高校生講座の様子（マンガによる記録）

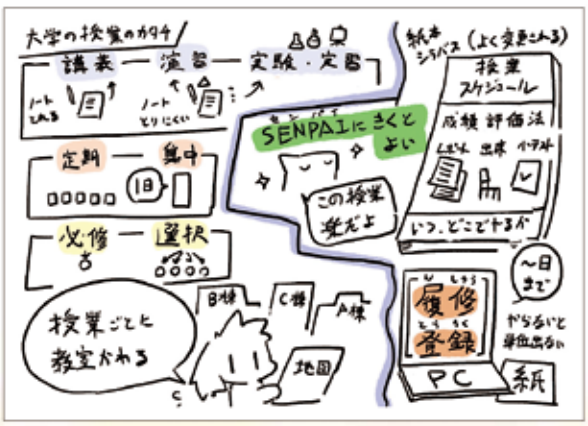
1

2

3



4

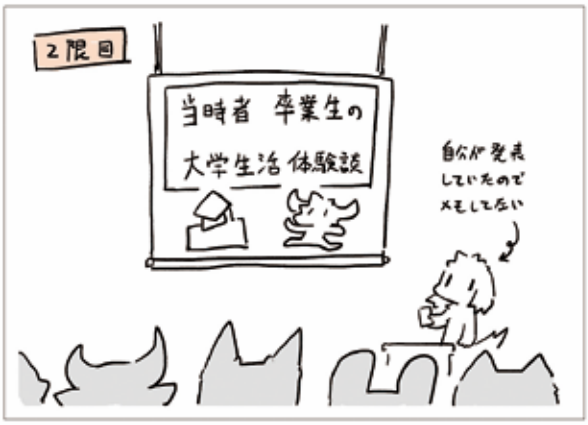


5

6

生活
実家ぐらし
1人ぐらし
田
ゼミ
研究室
授業の空き コマ
授業内容と提出物の期限伝わらない
先生ドともだちにきこう
3〜4年でようやく出たらその時間で進路とるヒトも
3組
大学生活は自分で決めて行動
むずかしいなあ

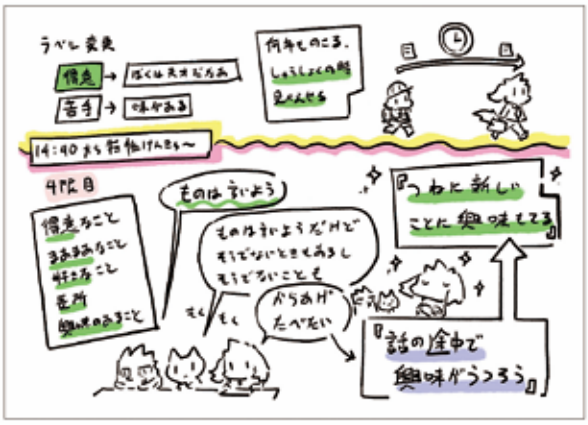
7


2限目
当時者 卒業生の
大学生活 体験談
自分が発表していたのでメモしてない

8

3限目 「自分の特性を理解・共有するアプリの説明・体験」
一人一人の得意なこと好きなことを軸にする
自分の特性とは…
特性を人に伝える
アイメモ
myomo
自記みたいに使えるかも
伝えるための練習
まるまるできること
好き
サポーター
気づいたことを受信
気づきの蓄積のチェック
どうやって気づいた?
→授業中
→生活場面
ファイルに出力
サポーター…情報共有してもいい人
メールアドレス必要
サポろう

9


ラベル変更
得意 → ぼくは天才だろ
苦手 → 味がある
何年ものこる。しょうしょくの時見えんだら
14:40から話合けんきゅう
4限目
得意なこと
まるまるなこと
好きなこと
苦手
興味のあること
ものは言いよう
ものは言いようだけどそうでないときもあるしそうでないことも
からあげたべたい
もく もく
『つねに新しいことに興味もてる』
『話の途中で興味がうつろう』

10

『つくばキッズメディカルユニバーシティ 2019』～小学生対象の医療現場体験ツアー～

【活動地域：茨城県つくば市】

附属病院　看護師　　関水　千夏

1 事業の概要

小学校高学年の子どもたちを対象とした講義を受けながら医療に関わる様々な最先端領域を実体験できる『キッズメディカルユニバーシティ』を夏休み期間中の２日間で開催した。

1）移植：臓器移植や命の大切さについての講義学習
2）パラスポーツ：パラリンピアから障がいに対する理解や新たな気づきを学ぶ講義学習
3）災害医療：体感型防災アトラクションの体験活動を通じて災害医療について実習
4）外科：心臓外科医と共に豚の心臓を用いた模擬心臓手術や最先端の医療技術体験
5）栄養：病院食を食べながらの栄養士からの食育学習
6）薬学：薬に関わる酵素の効能を知る実験
7）宇宙医学：フライトサージャンによる講演や仮想宇宙体験
8）看護：看護師と共に採血・バイタルサイン測定・輸液管理の実習
9）救急看護：フライトナースによるドクターヘリに関する講義学習
10）救急医療：救急医・医学生と共に心肺蘇生体験

2 事業成果の概要

大学の知的財産をフルに利活用する事で対象者である小学生が実際の医療現場の模擬体験から『身体のしくみや命の大切さ・人への思いやり』を熟考できた。同時に多様な感覚・期待をもつ子ども達に『未来の医療人を目指すためのプロローグ』の場を提供し得た。

3 地方自治体との連携

近隣地域（つくば市・つくばみらい市・守谷市）３市の教育委員会を通じて本企画のチラシを事前配布したところ定員（各回 31 人の２回開催）を大幅に上回る応募があった。

4 今後の展望

参加者のアンケート結果を詳細に分析し、従来の単純な教育普及活動の一環のものとは異なった医科学技術リテラシー涵養活動の体系化やアフォーダンス効果・新たな学習プログラムの開発に還元させていきたい。

5 その他

企画内容は各種 SNS や読売･茨城新聞に掲載された。

Tsukuba Kids Medical University

つくばキッズ メディカルユニバーシティ

プログラム

第1回 7/30(火) 9:00～17:30
- 移植セミナー
- パラスポーツセミナー
- 災害医療セミナー
- 外科セミナー

第2回 8/20(火) 9:00～17:30
- 薬剤セミナー
- 宇宙医学セミナー
- 看護セミナー
- 救急看護セミナー
- 救急医療セミナー

※7月30日の回にはメディア取材が入る可能性がありますので予めご承知ください。

第1回 2019 7月30日(火)　第2回 2019 8月20日(火)　両日とも 9:00～17:30

会場：筑波大学附属病院（つくば市天久保2-1-1）

●応募方法

当院WEBサイト（www.hosp.tsukuba.ac.jp）新着情報の応募フォームからお申込みください。
応募は6/28(金)締切とさせていただきます。
参加者は厳正なる抽選により7/12(金)までに当選者へご連絡します。
但し、参加者は各小学校1校につき最大2名までとさせていただきます。

●募集人数：各回30名
つくば市、つくばみらい市、守谷市のいずれかに在住の小学校5・6年生対象

●費用：無料

●持ち物：筆記用具、水筒

※当日は動きやすい服装でお願いします。　※送迎はご家族の方でお願いします。

平成31年度 筑波大学 社会貢献（地域貢献）プロジェクト

筑波大学附属病院
University of Tsukuba Hospital

国際標準心肺蘇生法の普及

【活動地域：茨城県つくば市】

医学医療系　准教授　　髙橋　伸二

1 事業の概要

地域の心肺蘇生のレベルを向上させるためには、病院での医師、看護師などの医療スタッフの教育だけでは不十分であることがわかってきている。また、専門職に就いた後も最新の蘇生ガイドラインの情報から、知識とスキルを維持していくことは簡単ではない。

このプロジェクトは、NPO 法人茨城トレーニングサイトと連携して、筑波大学から地域の医療スタッフの教育や一般市民の蘇生教育を発信することを目的とする。

2 事業成果の概要

当プロジェクトによって、筑波大学で AHA の BLS コース、ACLS コース等を開催することができた。当プロジェクトが支えている教育プログラムは数多く、主には①茨城トレーニングサイトの支援、②神栖プロジェクトの支援、③筑波大学附属病院内レジデント教育（入職時の ACLS など）である。茨城トレーニングサイトの協力で、茨城県内の各地で米国心臓協会（AHA）準拠の蘇生教育を展開できた。表のように茨城トレーニングサイトの活動を筑波大学として支援することができた。神栖市において小学生、中学生対象の蘇生教室と養護教諭に対する蘇生講習会を開催した。

さらに、今年度は院内のレジデント、医療スタッフの教育目的に、「産科救急」「小児救急」のテーマで講演会を開催した。産科救急では昭和大学医学部麻酔科教授の加藤里絵先生を、小児救急では小児麻酔学会理事長、国立成育医療研究センター手術・集中治療部統括部長の鈴木康之先生をそれぞれお招きし、最新の情報をご教授いただいた。

鈴木康之先生

2019 年度茨城トレーニングサイトコース開催実績

※ 2019 年4月1日～ 2020 年3月 31 日

	コース名	開催数	受講者数
1	BLS（G2015）	34	550
2	ACLS（G2015）	13	159
3	ACLS EP（G2015）	5	20
4	PEARS（G2015）	6	70
5	PALS（G2015）	3	24
6	FIRST AID（G2015）	5	166
7	HSCPR AED（G2015）	4	181
8	HSFA CPR AED（G2015）	3	62
9	CORE IC	2	26
10	BLS IEC（G2015）	1	18
11	ACLS IEC（G2015）	1	5
	総計	77	1,281

3 地方自治体等との連携

1）茨城県庁医療対策課：茨城県内の初期臨床研修医・後期臨床研修医・救急指導医を対象に実施した。

2）茨城県庁消防防災課・茨城県立消防学校：茨城県内の救急救命士向けの ACLS、救急隊員・消防職員向けの BLS、初任科生に対して AED コースを実施した。

3）茨城県医師会：医師会会員向けのコースを開催した。

4）茨城県内地域メディカルコントロール協議会：茨城県内の救急医療協議会と連携し、地域密着型で開催した。

5）一般市民普及活動：神栖市において小中学校を対象に蘇生教室実施した。

筑波大学社会貢献プロジェクトは、県内の医療従事者の蘇生講習会への受講機会増加を提供している。心肺蘇生に高度な知識と技術をもった医療人を確実に増やし、地域医療に貢献している。これらの活動は、関係各所から高い評価を受けることができた。

神栖市養護教諭対象コース（2019 年 8 月 20 日）

神栖市蘇生教室（2019 年 7 月 1 日）

茨城県は首都圏にありながら、まだまだ医師数が少ないという問題点を抱えている。本プロジェクトは初期研修医に対して蘇生講習会の受講補助を行っている。本プロジェクトは、筑波大学学内の医師、医療スタッフの教育の教育ばかりでなく、広く地域に貢献しており、共同で活動している AHA 茨城トレーニングサイトでの受講者数も高い水準で推移している。

筑波大学 ACLS コース（2019 年 8 月 12 日）

4 今後の展望

筑波大学は茨城県に多くの医療スタッフを輩出している。医学教育は、大学を卒業したら終わりではなく、そこからキャリアが終わるまで常に新しい知識と技術を学んで行かなければならないものである。さらに、救急医療現場では、バイスタンダーの蘇生行為が傷病者の予後を改善することがわかってきており、地域を巻き込んだ高いレベルの教育組織が必要になってくる。本プロジェクトによる研修会指導者・修了者が茨城県の救急医療を担い、そのネットワークは県の救急医療を支えている。継続した活動と更なる講習会の開催を企画していくことが重要な課題である。

筑波大学 BLS コース（2019 年 7 月 27 日）

5 その他

本プロジェクトを支えて下さった、茨城トレーニングサイト、筑波大学救急集中治療部、麻酔科、循環器内科、筑波大学附属病院看護部、国立病院機構水戸医療センターの皆様に心から感謝申し上げます。

筑波大学 BLS コース（2019 年 7 月 27 日）

ゆうゆうゆう会

【活動地域：茨城県つくば市】

人文社会科学研究科　博士前期課程　　澤井　雪乃

1 事業の概要

「ゆうゆうゆう会」は吃音のある子どもたちが、吃音をもちながら健やかに成長発達できるようにサポートする会である。学齢期以降の吃音では、学校生活において「音読」や「発表会」など人前で話す機会が増えるため、子どもたちは吃音の課題と向き合うことが多くなる。そのため学齢期以降の吃音では言語治療だけでなく、他の吃音のある子どもや大人との交流を通して吃音について学び合い、吃音を持ちながらも健やかに生きるための実践が必要とされている。「ゆうゆうゆう会」では 2019 年５月～ 2020 年３月までの間、社会貢献プロジェクトの経費支援を受けながら、月１回筑波大学内で交流会を実施した。

2 事業成果の概要

2019 年５月から 2020 年３月にかけて一回２時間の交流会を計９回実施した。毎回の参加人数は、お子さんと保護者を合わせて約 15 名であり、全９回の交流会を通して、15 組の家族が参加した。交流会は、小学生、中学生・高校生、および保護者の３グループに分かれて実施した。具体的な活動内容を以下に示す。

【活動内容】

１．はじめの会：スタッフ紹介、アイスブレイク

２．グループ活動

・小学生：遊びを通した交流

・中高生：スタッフとの座談会（吃音の相談など）

・保護者：スタッフとの座談会（子育ての相談など）

３．おわりの会：グループ活動の振り返り、感想の共有

吃音のある小学生は、同じ吃音のある同年代の子どもやスタッフと遊びを通して交流し、中学生・高校生はスタッフも交えた座談会を実施した。また、保護者はスタッフも交えて吃音に関する情報交換を行った。当初は内気であった小学生が、自ら積極的に発言する姿や、保護者同士で吃音のある子どもの子育てについてアドバイスする姿が見受けられ、有意義な活動となった。

参加者およびスタッフの集合写真

3 地方自治体等との連携

茨城県つくば市で活動している「茨城言友会」に活動をサポートして頂いた。茨城言友会は吃音のある成人のセルフヘルプグループであり、月１回つくば市内で例会を開催している。茨城言友会の会員の皆さんには、吃音のある子どもへの接し方や保護者へのアドバイスの仕方など様々な助言を頂いた。今後は「茨城言友会」と協力し、吃音に関するイベントを共同で企画するなどより連携を強めていきたい。

4 今後の展望

小学生の参加者から、「もっと吃音の勉強がしたい」という意見を頂いている。今後は、参加者の要望を丁寧に汲み取りながら、活動内容を発展させていく。

地域市民を対象にした BLS 講習会、健康教育

【活動地域：茨城県筑西市、つくば市】

医学群医学類　福元　崇人

1 事業の概要

筑波大学の医学生・看護学生の有志が所属する学生団体「CoMed つくば」（コメドツクバ）では、小中学校や地域のイベントにおいて BLS（一次救命処置：心肺蘇生法のこと）の講習会や健康に関する健康教育を実施している。活動を通して健康に関する諸問題が決して他人事ではないことを参加者に認識していただき、延いてはこれが地域全体の健康増進に寄与することを目的としている。

2 事業成果の概要

平成 31 年度は講習会を 10 回（BLS 講習会７回、熱中症予防のための健康教育３回）実施した。

1）BLS 講習会

小中学校の生徒や教職員を対象に、胸骨圧迫の仕方や AED の使い方について説明した。その後倒れた人を発見した際に心肺蘇生法を実践できるよう、訓練用のマネキンや AED を用意し数人でロールプレイングにも取り組んでもらった。参加者からは「倒れた人を助けるには周りの人が協力することが大切だと分かった」との感想が聞かれた。参加者が今後心停止の人を発見した際には適切な心肺蘇生法を実施し救命できることを期待する。

BLS 講習会で使用した訓練用マネキンと AED

2）熱中症予防のための健康教育

小中学校の生徒を対象に、熱中症とは何か、予防するためにはどうすればよいのかなどを説明した。特に中学校では夏の部活動の際に熱中症になることが懸念されるため、部活動ごとに具体的な予防策を考えてもらった。また自宅でも簡単に経口補水液が作れる方法を実践しながら紹介した後、希望する参加者にはそれを味見してもらった。

参加者に経口補水液の作り方を説明する様子

3 地方自治体等との連携

小中学校での活動では各学校の教職員の皆様にご協力いただいた。特に筑西市内での活動においては筑西市役所の皆様にご協力いただいた。

4 今後の展望

地域全体の健康増進を目指し今後も各学校や自治体との連携を密に取り、講習会の開催を継続していきたい。また参加者のアンケート結果を分析し講習会の内容をさらに向上させていきたい。

5 その他

他団体の主催する３件のイベントに参加し BLS の普及活動を行った。

地域在住の父子（男子小児および父親）を対象としたボード・ゲームを用いた運動習慣向上についての検証

【活動地域：茨城県つくば市】

附属病院　理学療法士　　鈴木　康裕

1 事業の概要

本事業について、新型コロナウイルスの影響により、当初予定していた取り組みは実施できなかったが、類似した取り組みを行った。

日本人大学生対象の連続横断研究では、過去 10 年間における歩数の低下が示されており、インターネットや携帯電話の利用増加などの社会環境の変化が一因となっている可能性が示唆されている。そこで我々は、筑波大学芸術系と共同し、学生を対象とした男性専用の教材（封竜の魔法使い）を開発した。本教材は、ゲームプレイを行うことで、楽しみながら参加者の身体活動量を向上させることを目的としたワークショップ形式のデバイス（ボード・ゲーム）である。

本研究の目的は、本教材を用いたゲームプレイを男子学生が行い、身体活動量が増加するかについての探索的検証を行うことである。本研究は、対象者 12 名を介入群（ゲーム・プレイ群）、対照群に６名ずつ無作為に割り付けた。介入は６週間、全４回（１回／２週間）のゲームを行い、１度でも不参加の場合は脱落とした。介入期間前後に２週間ずつ対照期間を設定し（研究期間：全 10 週間）、最初の２週間をベースライン期間、最後の２週間を介入効果の持越し観察期間とした。被験者の身体活動量の測定は、研究開始時、介入開始時、介入開始２週間後、４週間後、６週間後（介入終了時）、８週間後（研究終了時）の全５回とした。また主観的満足度評価については、研究終了時に行われた。

本教材でのゲームルールは、１卓６名参加によるボード上での陣取り方式であり、１人４ターンが与えられ、他プレーヤーとの戦闘や探索行動を行い、より多くの陣地を獲得した場合に勝利となる。さらに、ゲームを行う間の期間ごと（本研究では２週間ごと）に、その期間の身体活動量が積算されゲーム開催時にプレーヤーにポイント還元（インセンティブ付与；たとえば戦闘力向上など）される仕組みである。つまり、ゲームを有利に進めるためには、プレーヤーは日常生活での身体活動量を増やす必要がある。

2 事業成果の概要

研究参加者の完遂率は 67%（介入群４名、対照群４名の合計８名／全 12 名）であった。本研究による介入の結果、歩数の変化は認められなかったが、中強度活動時間は対照群と比べて介入群で有意に増加し、経時的変化についても、介入群でベースライン期間から介入期間および介入後観察期間にかけて有意な増加が認められた。また、研究終了時に行われた主観的満足度評価により、対照群と比べて介入群は本研究に対する満足度が有意に高いことが示された。

本教材のちらし
および実施風景

3 今後の展望

本教材の応用を、今後地域の塾や学校などで展開していきたい。

4 その他

ゲーミフィケーションを利用した健康教材（ボード・ゲーム）のプレイは、男子学生を対象とした場合、歩数の増加は認められないが、中強度活動時間は増加する可能性が示唆された。

外国人介護職員の就労支援プロジェクト

【活動地域：茨城県】

医学医療系　准教授　　柳　久子

1 事業の概要

介護の領域にて活躍する外国人介護職者の確保と、より長期的な就労の継続を促進するため、支援活動を展開することを目的としている。

特別養護老人ホームや介護老人保健施設などの介護保険施設にて雇用契約を結ぶ外国人介護職者を対象に、日本語の向上と介護福祉士資格取得を目指した授業を中心に実施し、介護領域における外国人人材の定着ならびに利用者へのケアの質の向上を図るものである。

2 事業成果の概要

これまで、茨城県内の特別養護老人ホームや介護老人保健施設、障害者支援施設に在籍し、経済連携協定（Economic Partnership Agreement：EPA）に基づき、介護福祉士の資格取得に向けて就労・研修に臨む外国人介護職者計７名へ教育支援活動を実践してきた。

いずれも法人より委託を受けての活動である。

７名のうち５名が介護福祉士の国家試験に合格し、４名が現在も介護の現場にて活躍中である。１名は、一時的に帰国したものの、母国にて結婚をされた後に配偶者と共に再び来日し、これまでと同じ施設へ介護福祉士として再入職予定である。

残念ながら合格とはならなかった２名の外国人介護職者については、時下、次年度の国家試験受験に向けて猛勉強中であり、合格を目指し、継続して教育支援を行っている。

『介護福祉士を志す彼女たちの、日本語学習授業の一場面』

3 地方自治体等との連携

本プロジェクトは、茨城県内の２つの社会福祉法人の下、５つの事業所と連携・協働を図りながら、外国人介護職者の安定した就労の継続の促進を目指す。

4 今後の展望

今後は、外国人人材育成に関連した、雇用者側へのコンサルティングも含めた支援活動を展開していく予定である。

いばらき周産期メンタルヘルス向上プロジェクト

【活動地域：茨城県】

医学医療系　准教授　　根本　清貴

1 事業の概要

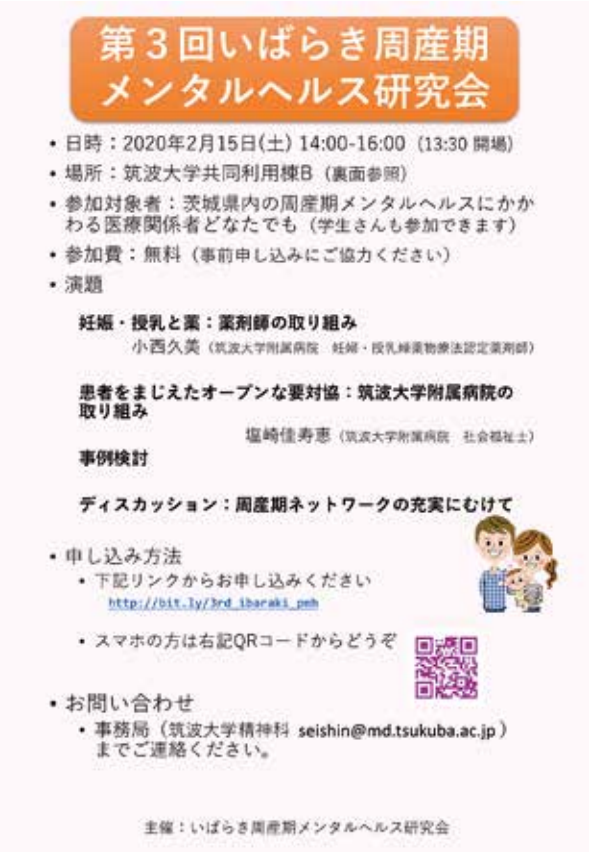
近年、「産後うつ」をはじめとした周産期メンタルヘルスの取り組みの重要性が叫ばれている。周産期メンタルヘルスは、産婦人科、小児科、精神科と医療機関内外での複数の診療科にまたがった横断的な取り組みが必要なばかりでなく、保健所や児童相談所といった行政との連携も必要となる。本プロジェクトは、茨城県において周産期メンタルヘルスに関わる関係者の「顔と顔の見える」ネットワークを構築する取り組みである。

2 事業成果の概要

本プロジェクトにおいて、以下の成果を挙げることができた。

1.「いばらき周産期メンタルヘルスメーリングリスト」を開始した。これは、周産期メンタルヘルスに関わる人々が情報を共有するためのツールとして機能している。現在 100 名を超える関係者がこのメーリングリストに登録されている。

2.「いばらき周産期メンタルヘルス研究会」を令和元年度は２回開催した。この研究会は、周産期メンタルヘルスの関係者が一堂に会し、周産期メンタルヘルスに関する最新の情報を入手したり、顔と顔の見える関係を築くことができるようにしたりすることを目的としている。2019 年９月 14 日に第２回研究会を茨城県立中央病院にて、そして、2020 年２月 15 日に第３回研究会を筑波大学にて開催し、それぞれ約 90 名の参加者が集まり、活発な意見交換が行われた。



3 地方自治体等との連携

地域に根差した活動を行うために、つくば保健所で開催されている「要支援妊産婦連携会議」に参加し、周産期医療におけるメンタルヘルスの維持に苦心している医療者および行政関係者との連携強化を図った。

4 今後の展望

草の根的活動により、茨城県の周産期メンタルヘルスのネットワークが築かれつつある。今後も「長続きする」活動を目指して、ネットワークを強化していきたい。

住民主導型減量支援プログラムの体系的評価

【活動地域：茨城県土浦市】

体育系　准教授　　中田　由夫

1 事業の概要

2015 年度より、茨城県土浦市において住民主導による減量支援プログラムを開催し、その成果を検証してきた。土浦市としては、2015 ～ 2019 年度の５年計画で本事業に取り組んでおり、2019 年度はその最終年度にあたったため、これまでの５年間の取り組みを体系的に評価した。

2 事業成果の概要

2015 年度より実施してきた「土浦市ダイエットリーダー（リーダー）」の養成と、リーダーによる減量支援プログラムの開催は、2019 年度も引き続き実施した。体系的な事業評価は、重松ら（2016）が提案した健康づくり事業のプロセスと成果を俯瞰できる評価方法である PAIREM（ペアレム）を活用した。この手法を活用することで、本事業のプロセスと成果を体系的に評価することを目指した。なお、PAIREM とは Plan（計画）、Adoption（採用）、Implementation（実施）、Reach（到達）、Efficacy（効果）、Maintenance（継続）の頭字語である。本事業の体系的評価結果を表に示した。Efficacy として、体重変化量は平均－6kg、肥満該当者は 124 人から 75 人となり、49 人（40%）が BMI 25 未満となった（図）。これは、Plan の事業目標「BMI 25 以上該当者の減少」を達成している。以上のことから、本事業は５年間継続することで、土浦市の健康課題解決に大きく貢献したと考えられる。

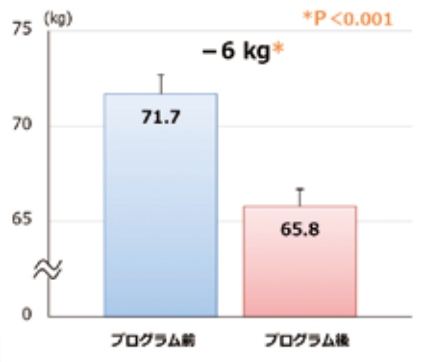


表　住民主導型減量支援プログラムの体系的評価

局面	
人口 人口密度 肥満者割合	139,389人 1,145.8人/km² 21.4%
Plan（計画）	
事業目標 事業期間 事業推進の範囲	BMI 25以上該当者の減少 ５年間 肥満者（BMI 25kg/m²以上 40kg/m²未満）
Adoption（採用）	
実施行政区の割合	100%
Implementation（実施）	
実施回数 ・市民公開講座 ・減量支援プログラム ・リーダー養成講習会	 延べ4回 延べ64回（８地区×８回） 延べ24回
Reach（到達）	
減量支援プログラム 参加者・完遂者	参加者162人 完遂者124人
Efficacy/Effectiveness（効果）	
減量効果 ・体重の変化 ・肥満該当者割合	（完遂者124人） 71.7 kg → 65.8 kg 124人（100%） → 75人（60%）
Maintenance（継続）	
ダイエットリーダーの活動継続状況	養成：39人 （2015－2018年度） ２年以上継続：27人

3 地方自治体等との連携

本事業は、土浦市側とも合意が得られた上で遂行しており、市が保有する調査データの提供を受け、今後、より詳細な検討を進める予定である。

土浦市イメージキャラクター
つちまる

Tsukuba for 3.11

【活動地域：茨城県つくば市】

理工学群応用理工学類　成田　隼翼

1 事業の概要

Tsukuba for 3.11は、つくば市と東北地方を拠点に活動する東日本大震災復興支援団体である。つくば市では避難者の自宅への訪問活動、東北地方では祭りスタッフのボランティアなどを行っている。またコミュニティ新聞「つくしま」を作成して、福島からつくばへと避難されている方々を対象に配布している。

2 事業成果の概要

毎年作成しているコミュニティ新聞「つくしま」と、新たに筑波大学生を対象に作成した「筑波大学生向けつくしま」の製作費として社会貢献プロジェクトを活用した。

【コミュニティ新聞「つくしま」】

本団体は、コミュニティ新聞「つくしま」を毎年作成・発行している。「つくしま」は、コミュニティのより強固な結束を築くため、福島から避難してきている方々とつくば市の間の繋がりを形成・維持し、つくば市民の被災者への理解や防災への注意喚起を促す内容となっている。また、福島での活動を掲載することで、避難者の方々に地元の様子を、またつくば市民には復興の様子を伝える。避難者の方々に配布するだけでなく、つくば市内の施設や、筑波大学構内、東日本大震災復興支援他団体、東北のボランティア先など、様々な場所に「つくしま」を配布している。

避難者の訪問活動を行った際、「つくば市の情報を得ることができず、なかなか地域行事等に参加できない」という話を聞いた。避難者に向けたコミュニティ新聞である「つくしま」だからこそ、彼らの声を取り入れ、寄り添った内容にできると考える。よりニーズに合った「つくしま」を作るため、今後も励んでいきたい。

【筑波大学生向け「つくしま」】

新たな取り組みとして、主に本団体の活動報告を掲載した「つくしま」を作成した。Tsukuba for 3.11がどのような団体なのか、復興支援とは何かを伝え、また東日本大震災を風化させないために、本団体を通して被災地の今を知ってもらうことを目的に作成した。

（左）通常版つくしま
（右）筑波大学生向けつくしま

3 地方自治体等との連携

「つくしま」を被災者の方々へ配布するには、つくば市役所を通して行っている。つくば市に住む被災者の方々へのひとつの情報源として、コミュニティ新聞「つくしま」を届け、コミュニティの結束を図る。

4 今後の展望

毎年発行し続けてきた「つくしま」を今後も作成するとともに、何が求められているのかを模索し、よりよい「つくしま」を作成したい。また筑波大学生向けの「つくしま」も続けて展開していきたい。

農業体験学習を通じた地元小学生の農業理解の推進

【活動地域：茨城県つくば市】

生命環境系　助教　　加藤　盛夫

1 事業の概要

筑波大学つくば機能植物イノベーション研究センター（以下、T-PIRC）農場では、2009 年以来、地域貢献活動の一つとして、地元小学校の「つくばスタイル科」授業における学習課題「地元の農業を知ろう」に協力して、農業体験の場として水田の一部を提供して田植えおよび稲刈り体験学習を実施している。今年度は、５年生児童が T-PIRC 農場を訪れ、６月に手植えによる田植え、10 月に手刈りによる収穫体験を行い、農業に関する理解を深めた。

2 事業成果の概要

2019 年は、田植え体験学習が６月４日（火）に T-PIRC 農場水田で行われた。農場水田を訪れた栗原小学校５年生児童 47 名は、T-PIRC 教員および技術職員から苗の植え方を教わり、水田用の足袋に履き替えて水田に入り、2a の水田に設置された田植用の綱に沿って、もち品種マンゲツモチの苗を移植した。

水田に入り一斉に田植えをする児童の様子

稲刈り体験学習は 10 月９日（火）に実施された。５年生児童 47 名は、T-PIRC 教員から収穫用鎌の使い方、稲の束ね方について説明を受けた後、技術職員の指導の下、６月の田植え体験学習で自分たちが植えたもち品種マンゲツモチを、鎌で１株ずつ刈取り、束ね、干すという一連の作業を体験した。

稲を収穫し束ねて干す作業を行う児童の様子

児童は水田における手植え移植、鎌による手刈り収穫を通じて、農業という生産活動への理解を深めることができた。児童は、本課題での体験をもとに、米作りについて学習して、「つくばの農業」についてレポートをとりまとめて、地元の農業についての理解をさらに深めている。

3 地方自治体等との連携

本課題は地元小学校の「つくばスタイル科」授業における学習課題「地元の農業を知ろう」に協力して実施している。茨城県は農業産出額全国第３位の農業県であり、本学の周囲も農村地帯であるが、地元小学生でも農業に触れる機会は意外に少なく、本課題の体験学習に参加する児童数も年々増加している。

4 今後の展望

本課題では田植え体験と収穫体験のみにとどまっているが、イネ生育期間中の水田の観察や収穫後の米の調理・試食も体験学習に加えることにより、環境教育や食育教育の効果も高くなると考えている。

5 その他

本課題は、T-PIRC 農場で実施している附属病院との協力事業であるデイケアプログラムと連携して実施した。具体的には、児童が植えた苗の播種作業は同プログラム参加者が行い、田植え体験における指導補助にも加わった。

筑波大学 社会貢献プロジェクト 2019−20

発　行　月　令和２年８月
発　行　元　筑波大学総務部総務課
〒 305 - 8577
茨城県つくば市天王台 1 - 1 - 1
E-mail　chiiki@un.tsukuba.ac.jp
URL：https://scpj.tsukuba.ac.jp/
印　　刷　いばらき印刷株式会社

筑波大学
University of Tsukuba